Hokkaido University News

北大時報

令和7年

3

No. 852 March 2025

北海道大学一般選抜(前期日程・後期日程)の実施と合格者の発表「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業(J-PEAKS)」伴走チームによるサイトビジットの実施 米マサチューセッツ大学アマースト校とシードファンドを開設

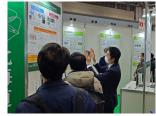


目 次

3







nano tech 2025に出展

■ 全学ニュース

- 北海道大学一般選抜(前期日程・後期日程)の実施と合格者の発表
- 3 令和6年度「北海道大学総長表彰」表彰式を挙行
- 4 第1回オープンアクセス・オープンサイエンス推進セミナー 「即時オープンアクセスと研究データ管理の実践」を開催
- 5 「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業 (J-PEAKS)」 伴走チームによるサイトビジットの実施
- 6 北海道大学創基150周年記念募金(北大フロンティア基金)
- 8 令和6年度北海道大学・北海道地区国立高等専門学校技 術職員交流研修を開催
- 9 nano tech 2025に出展
- 10 「HACK FOR IMPACT: 共創で未来を生み出すハッカ ソン」を実施
- 11 高校生向け起業体験プログラム「Startup Base U18 in札 幌西高校」を実施
- 12 「アントレまちなか留学」を開催
- 13 「科学と野球で学ぶアントレプレナーシップ〜科学実験 ・野球教室〜」を開催
- 14 「学校EXPO in新宿髙島屋」に出展
- 15 米国マサチューセッツ大学アマースト校とシードファンドを開設
- 16 SDGs北海道セミナー2025を開催
- 17 「国民との科学・技術対話」支援事業 アカデミックファ ンタジスタ 講師が講義、見学を実施

■部局ニュース

- 19 理学院物性物理学専攻と国立台湾成功大学理学院物理学系がダブル・ディグリー・プログラムの覚書の細則を締結
- 20 先端生命科学研究院ソフトマター国際連携ユニット(SMCR)が LeNet 国際シンポジウム「Low Entropy Soft Matter」を開催
- 21 令和7年度薬学実務実習開始セレモニーを挙行
- 22 総合化学院と国立陽明交通大学理学院がダブルディグリープログラムを締結
- 23 令和6年度農学研究院FD研修会を開催
- 24 北海道札幌北高等学校が遺伝子病制御研究所にて職場体 験プログラムを実施
- 25 人獣共通感染症国際共同研究所、総合イノベーション創発機構ワク チン研究開発拠点ディスティングイッシュトプロフェッサーの鈴木定 彦教授がタイ王国ラーマ10世からタマサート大学名誉博士号を授与
- 26 北方生物圏フィールド科学センター研究林が中川町のき こり祭に初出展
- 27 環境健康科学研究教育センターが公開セミナーを開催

■ 表敬訪問 28

■ 定年を迎えるにあたって 29

人事 53

53 新任教授紹介

計報

54 医学研究院 助教 打浪 雄介 氏



高校生向け起業体験プログラム 「Startup Base U18 in札幌西高校」を実施



「科学と野球で学ぶアントレブレナーシッフ ~科学実験・野球教室~」を開催



SDGs北海道セミナー2025を開催



「国民との科学・技術対話」支援事業 アカデミックファンタジスタ 講師が講義、見学を実施

表 紙:「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業 (J-PEAKS)」伴走チームによるサイトビジットの実施(関連記事5頁に記載)

裏表紙:キャンパス風景⑩ 第一体育館(北17条西7丁目)

■全学ニュース

北海道大学一般選抜(前期日程・後期日程)の実施と合格者の発表

令和7年度本学一般選抜の前期日程試験を2月25日(火)・26日(水)に、後期日程試験を3月12日(水)に実施しました。 各試験の実施状況等は、次のとおりです。

1. 前期日程

志願者5,248名のうち、本学が指定した大学入学共通テストの受験を要する教科・科目を受験していなかった無資格者12 名を除く志願者について、2段階選抜の第1段階選抜を行いました。その結果、志願者全員が合格し、個別学力検査等の受験 対象者は5,236名で、受験者は5,116名でした。

合格者は2.043名で、合格発表は、3月6日(木)午前9時に本学ホームページで行いました。

なお、合格者の出身高校別では、道内高等学校出身者が681名で全体の33.3%。卒業年度別では、令和7年3月高等学校卒 業者が1,511名で全体の74%。また、男女別では女子が634名で全体の31%でした。

2. 後期日程

志願者4,158名のうち、本学が指定した大学入学共通テストの受験を要する教科・科目を受験していなかった無資格者7名 を除く志願者について、2段階選抜の第1段階選抜を行いました。その結果、志願者全員が合格し、個別学力検査等の受験対 象者は4,151名で、受験者は1,654名でした。

合格者は529名で、合格発表は、3月21日(金)午後4時に本学ホームページで行いました。

なお、合格者の出身高校別では、道内高等学校出身者が61名で全体の11.5%。卒業年度別では、令和7年3月高等学校卒業 者が364名で全体の68.8%。また、男女別では女子が129名で全体の24.4%でした。

(学務部入試課)

令和7年度一般選抜(前期日程)合格者数等一覧

学部・学科等			部・学科等	募集人員	受験対	象者	欠席者	z. I	受験	者	倍率	合格和	
	文系			95	340	(92)	7	(2)	333	(90)	3.5	106	(28)
4.0		数	学重点選抜群	133	508	(71)	6	(0)	502	(71)	3.8	137	(22)
総合		物理	理重点選抜群	239	618	(79)	9	(0)	609	(79)	2.5	245	(27)
総合入試	理系	化	学重点選抜群	240	580	(155)	8	(3)	572	(152)	2.4	248	(60)
pr-V	71.	生物	勿重点選抜群	169	413	(190)	16	(9)	397	(181)	2.3	174	(75)
		総介	合科学選抜群	253	536	(175)	11	(5)	525	(170)	2.1	260	(74)
	文学音 教育学			118	369	(165)	6	(2)	363	(163)	3.1	122	(46)
			部	20	46	(24)	0	(0)	46	(24)	2.3	21	(10)
	法	法学部		140	302	(115)	3	(2)	299	(113)	2.1	143	(53)
	経済学部			140	341	(75)	1	(0)	340	(75)	2.4	146	(32)
		医学科		85	298	(80)	15	(4)	283	(76)	3.3	89	(26)
学部			看護学専攻	60	103	(96)	1	(1)	102	(95)	1.7	69	(65)
学部別入試	医学部	保	放射線技術科学専攻	28	67	(32)	2	(1)	65	(31)	2.3	34	(16)
試	部	健学	検査技術科学専攻	25	75	(50)	1	(1)	74	(49)	3.0	36	(25)
		科	理学療法学専攻	13	52	(15)	5	(4)	47	(11)	3.6	16	(3)
			作業療法学専攻	10	34	(17)	4	(4)	30	(13)	3.0	16	(12)
	歯			38	154	(74)	17	(6)	137	(68)	3.6	42	(23)
	獣	獣医学部		20	90	(54)	1	(1)	89	(53)	4.5	22	(11)
	水	水産学部		105	310	(80)	7	(2)	303	(78)	2.9	117	(26)
			計	1,931	5,236	(1,639)	120	(47)	5,116	(1,592)	2.6	2,043	(634)

^{※()}内の数字は女子で内数

令和7年度一般選抜(後期日程)合格者数等一覧

学部・学科等		学部・学科等	募集人員	受験対象	象者	欠席者	<u>k</u>	受験者	<u>خ</u> ا	倍率	合格和	<u></u>
	文=	学部	37	380	(122)	243	(77)	137	(45)	3.7	50	(16)
	教	育学 部	10	78	(38)	55	(27)	23	(11)	2.3	11	(5)
	法学部		40	429	(129)	277	(80)	152	(49)	3.8	48	(16)
	経済学部		20	189	(38)	131	(24)	58	(14)	2.9	28	(9)
		数学科	10	142	(9)	84	(5)	58	(4)	5.8	10	(2)
		物理学科	3	98	(6)	54	(4)	44	(2)	14.7	9	(0)
	理学部	化学科	20	188	(32)	106	(19)	82	(13)	4.1	18	(3)
	部	生物科学科 生物学専修分野	10	71	(22)	34	(9)	37	(13)	3.7	10	(3)
学		生物科学科 高分子機能学専修分野	2	19	(8)	9	(2)	10	(6)	5.0	2	(1)
学部別入試		地球惑星科学科	5	81	(20)	48	(10)	33	(10)	6.6	7	(1)
試	人 菜学部		24	382	(159)	222	(85)	160	(74)	6.7	32	(11)
		応用理工系学科	29	240	(24)	163	(18)	77	(6)	2.7	38	(1)
	工学部	情報エレクトロニクス学科	38	363	(24)	239	(15)	124	(9)	3.3	45	(4)
	部	機械知能工学科	25	160	(9)	97	(6)	63	(3)	2.5	29	(2)
		環境社会工学科	47	374	(77)	209	(38)	165	(39)	3.5	55	(14)
	農学部		53	451	(158)	265	(96)	186	(62)	3.5	62	(18)
	獣医学部		15	108	(60)	38	(20)	70	(40)	4.7	15	(7)
	水点	産学部	50	398	(101)	223	(56)	175	(45)	3.5	60	(16)
		計	438	4,151	(1,036)	2,497	(591)	1,654	(445)	3.8	529	(129)

※()内の数字は女子で内数

令和6年度「北海道大学総長表彰」表彰式を挙行

2月6日(木)、「教育研究総長表彰」 表彰式が執り行われ、関係者列席のも と、寳金清博総長から被表彰者に、表 彰楯及び報奨金(目録)が授与されま した。

教育研究総長表彰は、教育活動及び 研究活動を通し、特に優れた功績を挙は、下記のとおりです。 げた教員を顕彰することにより、本学 の活性化と更なる発展に資することを 目的としたものです。

なお、この度表彰を受けられた方々

(総務企画部人事課厚生労務室)



表彰式の様子



寳金総長、山口淳二理事・副学長、受賞者及び部局長との記念撮影

教育研究総長表彰

区分	所属		E	E	1	占
教育	高等教育推進機構		杜		長	俊
教育	高等教育推進機構		肖			蘭
教育	水産科学研究院		上	野	洋	路
教育	理学研究院		木	村		敦
教育	メディア・コミュニケーション研究院		佐々	∀ ⊞	博	教
教育	メディア・コミュニケーション研究院		渡	部	聡	子
教育	医学研究院		高	橋		誠
研究	工学研究院		佐	藤	敏	文
研究	工学研究院		永	田	晴	紀
研究	歯学研究院		樋	田	京	子
研究	文学研究院		宮	園	健	吾
研究	低温科学研究所		西	岡		純
研究	電子科学研究所	BI	JU VA	SUDI	EVAN	PILLAI
研究	人獸共通感染症国際共同研究所		佐々	木	道	仁
研究	人獸共通感染症国際共同研究所		松	野	啓	太

第1回オープンアクセス・オープンサイエンス推進セミナー 「即時オープンアクセスと研究データ管理の実践」を開催

2月17日(月)、オープンアクセス・ オープンサイエンス推進委員会主催 で、第1回オープンアクセス・オープン サイエンス推進セミナー「即時オープ ンアクセスと研究データ管理の実践」 をオンラインで開催しました。

日本では、学術論文や根拠データの 即時オープンアクセスの方針が示さ れ、令和7年度の公募分から、科研費 等の公的資金による研究成果の即時オ ープンアクセス化が始まります。ま た、令和6年度以降に実施する科研費 課題については、研究データの管理計 画書であるデータマネジメントプラン (DMP) を活用し、研究データの適 切な管理や利活用をすることが求めら れています。

本セミナーは、これらを踏まえ、オ ープンアクセス・オープンサイエンス を実施、推進する際の注意点などにつ いて、基本的な概念や意義、国際情勢 や国の最新動向などを交えながら紹介 するために企画しました。

最初に、瀬戸口剛理事・副学長が開 会挨拶を行った後、大学共同利用機関 法人情報・システム研究機構国立情報 学研究所の船守美穂准教授が「オープ ンアクセス/オープンサイエンスの国内 外の動向とこれらへの対応の考え方」 と題した講演を行いました。

その後、附属図書館事務部研究支援 課の鵜澤和往課長による「機関リポジ トリ (HUSCAP) の紹介」、情報基盤 センターの棟朝雅晴センター長による 「本学における研究データ管理・利 活用に関わる現状と今後の対応につい て |、研究推進部研究振興企画課の竹 内佑介課長による「『北海道大学研究

データポリシー』の紹介」の講演が行 われました。

講演後の質疑応答では、参加者から は研究データの公開や保存に関する質 問等が寄せられ、講演者がそれぞれ回 答しました。

本講演会は、学内外229名(うち学

外からの参加125名)が参加しました。 開催終了後のアンケートでは、「基 本的なところからの講演もあり、大変 勉強になった」「研究発信力の強化、 研究の幅拡大、研究資源の保全・継承 等の意義が分かった|「北海道大学の 取り組み内容が分かり大変参考になっ

(研究推進部研究振興企画課)



講演する船守准教授



講演する棟朝センター長



た」など好評でした。

講演する鵜澤課長



講演する竹内課長

「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業(J-PEAKS)| 伴走チームによるサイトビジットの実施

2月6日(木) 「地域中核・特色ある 研究大学強化促進事業(J-PEAKS)」 伴走チームによるサイトビジットが実 施されました。

J-PEAKSは、地域の中核大学や研究 の特定分野に強みを持つ大学が、その 強みや特色のある研究力を核とした戦 略的経営の下、他大学との連携等を図 りつつ、研究活動の国際展開や社会実 装の加速等により研究力強化を図る環 境整備を支援することにより、我が国 全体の研究力の発展を牽引する研究大 学群の形成を推進することを目的とし ています。本学は、令和5年度に「フィ ールドサイエンスを基盤とした地球環 境を再生する新たな持続的食料生産シ ステムの構築と展開」を提案し、採択 されています。

今回のサイトビジットは、J-PEAKS の中核となる研究拠点等の視察と、本 学執行部との意見交換を通じ、事業の 進捗状況の確認や課題を把握するこ と、本学の歴史や強み、特色が分かる 施設等を視察し、実態を把握すること を目的としました。

当日は、本学の担当サポーターであ る長我部信行氏(株式会社日立ハイテ ク コアテクノロジー&ソリューション

事業統括本部エグゼクティブアドバイ ザー)をはじめ、伴走チーム、文部科 学省、日本学術振興会の関係者計18名 が来学しました。

はじめに、理学部本館において、寳 金清博総長から本学が目指す「Novel Japan University Model」について説 明が行われました。続いて、瀬戸口剛 理事・副学長からJ-PEAKSにおける 本学の取り組みと進捗について説明を 行った後、伴走チームとの意見交換が 行われました。意見交換では、本学の 人材、組織、土地など様々な資産の活 用、地域貢献、ガバナンスの強化、評 価指標達成に向けての方策など、多岐 にわたり質疑応答が行われました。

引き続き、本学の総合博物館及びス マート農業教育研究センターの視察が 行われました。総合博物館では、坪田 敏男館長、江田真毅研究部長とともに 館内の見学を行い、本学の歴史や展示 物に触れていただきました。その後、 スマート農業教育研究センターに場所 を移し、西邑隆徳副学長からリジェネ ラティブな持続的食料生産システムに 関する研究についての説明を、後藤貴 文北方生物圏フィールド科学センター 教授から次世代和牛生産システム構築

拠点についての説明を、野口 伸農学 研究院長からトラクターの遠隔操作を 交えて、スマート農業教育研究センタ ーにおける革新的スマート農業研究に ついての説明を行いました。

これらの取り組みについて、伴走チ ームから、大学の哲学から始める骨太 の話に加え、研究者の熱のこもったプ レゼンと実演で北大の目指す姿を効率 よく体験ができたとの感想をいただい たほか、豊富なフィールドとそこで行 われていく研究への期待の声が寄せら れるとともに、今後、北大が持つ豊か なフィールドというアセット(資源) から、どのように北大のビジョンを実 現するための原資を生み出すのかを共 に考えていきたいとの言葉をいただき ました。

本学では、J-PEAKSを通じて、国 内外の大学・研究機関・企業との連携 を一層深め、最先端の研究推進と社会 実装に向けた取り組みを加速し、持続 可能なWell-being社会の実現を目指し てまいります。

(研究推進部研究支援課)



寳金総長による説明



西邑副学長によるリジェネ農業の説明



意見交換の様子



野口農学研究院長によるトラクターの 遠隔操作デモの様子

北海道大学創基150周年記念募金(北大フロンティア基金)

北海道大学は、創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学として の使命を果たすため、平成18年10月に北大フロンティア基金を創設しました。

奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、息の 長い募金活動をすることとしています。

2026年、北海道大学は創基150周年を迎えます。次の150年を見据えた記念事業のため、2023~2026年度の4年間、北大フ ロンティア基金は「創基150周年記念募金」として、皆様からのご寄附を募集しております。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金創設時累計 (1月31日現在) /52,725件 7.824.874.334円 **うち、北海道大学創基150周年記念募金累計** (1月31日現在) / 15,677件 1.660.105.777円

<ご寄附状況>

1月は313件55,554,998円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいている方々のご芳名を掲載させていただきます。 (五十音別・敬称略)

寄附者ご芳名 (法人等)

株式会社HBA、エーワイハッピー株式会社、江別市立病院、金丸歯科クリニック、株式会社キットアライブ、医療法人社団恵友会あの歯科医院、 工学部精密工学科4期生同窓有志、医療法人社団札幌はるか会加藤直子皮膚科スキンクリニック、佐藤信孝法律事務所、

スパークス・アセット・マネジメント株式会社、医療法人スワンアイクリニック、社会医療法人製鉄記念室蘭病院、

医療法人社団高木皮膚科診療所、高砂熱学工業株式会社、株式会社ダンテック、医療法人知仁会八木整形外科病院、

医療法人中の島はやし皮フ科、株式会社ノア、富国生命保険相互会社、医療法人豊慈会、社会医療法人北晨会恵み野病院、

北電総合設計株式会社、株式会社北海道グリーンメンテナンス、北海道大学野球部OB会、本間塗装株式会社、株式会社マイカンパニー、

医療法人松澤デンタルクリニック、医療法人社団室蘭なかじま皮膚科クリニック、株式会社八洲機電、やすおか皮膚科クリニック、よこた歯科

寄附者ご芳名(個 人)

			1				
合川 正幸	青井 良平	青木 俊介	青木 伸	青木 宏	赤平 幸郎	朝井 克司	浅沼 佳南
東陸	阿部 桂子	安部 史郎	阿部 雅史	飯塚 一	石井 哲夫	石垣 隆弘	石橋 文子
石丸 昌宏	市川 宏伸	伊藤 雄三	井上 将希	猪股 路子	今井 晋	入澤 秀次	上田 雅敏
上村 稔	内村慎・知榮子	内山 正明	梅本 由佳	縁記 和也	遠藤 公憲	大石 博昭	大澤 恵利
大原 正範	岡田 英子	沖崎 遼	小田原一史	小原 大和	片山 琢	加藤 達哉	加藤 伸康
加藤 政俊	金川 眞行	金澤 諭	金子豊三郎	上村 明男	川手 雅美	川畑いづみ	河本 充司
北村 真也	衣川 暢子	久保 吉史	久米 吉裕	倉田 博司	栗原 誠治	桑名 真人	小池 充
上月 浩	小林 賢人	小室 八郎	小山 司	近藤 陽祐	齋藤 和雄	齊藤 晋	齋藤 久
斎藤瑠衣子	坂本 大介	崎元 大志	佐々木一夫	佐々木悠貴	佐藤貴美子	佐藤 紘一	佐藤 譲治
佐藤 徹雄	三升畑元基	塩満 正哉	志済 聡子	志田 裕子	島谷 和秀	清水 修	清水 忠道
菅原 新也	杉江 和男	鈴木 敬二	鈴木 誠一	鈴木 貴之	須藤 修方	瀬名波栄潤	髙井 伸二
高瀬登志彦	高橋 英之	高柳 涼	田栗 和奈	武山 忍	田中 和裕	谷 博文	谷口 正樹
千見寺貴子	土家 琢磨	寺澤 睦	照屋 均	富樫 康博	戸田 靖久	豊﨑 一彦	豊田 威信
豊永 愛恋	長岡 三郎	永田 誠	中野 雅俊	中野 昌之	西田 和代	根本 叔治	野口 淳史
野口 豪	野寺 義典	萩原 弘人	長谷川尚明	秦 洋郎	花田 秀一	林 卓司	林 達也
林 倫太郎	原 啓介	原島 秀吉	平川裕理恵	廣木 誠	廣重 勝彦	福田 正晴	福永 悟郎
藤澤 裕子	藤田 芳康	古川夕里香	星 貞雄	松井 耕二	松原 謙一	松元 和幸	松本 範雄

三木 證永	南田 大朗	三原 達美	三宅 麻子	宮田 知己	宮田 信幸	村井 隆	村上 広輝
村瀬徳啓充	村瀬 亮太	村武 直樹	本木 舞	元木 佳弘	森 和弘	森本 裕二	八鍬 時雄
山口 淳二	山田 知充	横関真由美	横浜 優樹	横山喜世子	横山 考	吉田 晃	吉田 幸治
吉田 隼人	吉田 広志	米田 英生	鷲巣絵利香	渡辺 恵司	渡部 訓仁		

<寄附者への特典>

創基150周年を記念した銘板

創基150周年を記念した銘板をご用意しました。銘板は、これまでのご寄附累計金額をもとに、本学総合博物館に掲出さ せていただきます。個人・法人共に、ご寄附の累計が1億円以上でプレミアムゴールド、1千万円以上でゴールド、500万 円以上でシルバー、100万円以上でブロンズとなります。

既存のホワイト銘板は累計20万円以上が対象です(令和2年度以前は総合博物館、令和3年度以降は百年記念会館に掲出)。 なお、銘板については、年度内に賜ったご寄附の累計を取りまとめ後、翌年度9月頃を目途に掲出いたします。

※このほか、ご寄附の金額に応じ、オリジナルグッズや感謝状の贈呈、御礼の場など様々な特典をご用意させていただ きます (詳細はこちらでご確認ください https://www.hokudai.ac.jp/fund/gratitude/)

<感謝状の贈呈>



田中利男様(令和7年1月22日)



北海道ガス株式会社様(令和7年1月28日)

ご寄附のお申し込み方法

北大フロンティア基金ホームページの「教職員からの寄附」にアクセスしてください。 https://www.hokudai.ac.jp/fund/howto-staff/

①給与口座からの引き落とし

ホームページから「北大フロンティア基金申込書(給与口座からの引落)」をダウンロードし、ご記入の上、卒業生・ 基金室 基金事務担当に提出してください。

②郵便局または銀行への振り込み

卒業生・基金室 基金事務担当にご連絡ください。払込取扱票をお送りします。

③現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、卒業生・基金室 基金事務担当までご持参ください。 申込書は、ホームページから「北大フロンティア基金申込書(教職員現金用)」をダウンロードしてご記入いただくか、 卒業生・基金室 基金事務担当にもご用意していますので、お越しいただいてからご記入いただくことも可能です。

④クレジットカード決済・コンビニ決済・PayPayでのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ

(https://www.hokudai.ac.jp/cgi-bin/fund/bin/xRegist.cgi) の寄附申し込みフォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 卒業生・基金室 基金事務担当(事務局・学内電話 2017)

令和6年度北海道大学・北海道地区国立高等専門学校技術職員交流研修を開催

令和6年11月から令和7年1月にかけ て、令和6年度北海道大学・北海道地 区国立高等専門学校技術職員交流研修 を開催しました。

本研修は、本学と北海道地区国立高 等専門学校の技術職員を相互に派遣す ることにより、技術職員のスキルアッ プ及びマルチスキル獲得の機会を創出 するとともに、技術職員が有するスキ ルや情報の共有を図り、両機関の連携 を強化し、技術職員の交流を促進する ことを目的に、北大コアファシリティ 構想研究支援人材育成プログラム、マ ルチスキル人材育成プロジェクトの事 業として行われました。

今回は函館工業高等専門学校、苫小 牧工業高等専門学校、旭川工業高等専 門学校が参加し、本学から各高等専門 学校(以下、高専)へ1名ずつ、各高 専から本学へ1名ずつ派遣する形式 で、計6名(本学3名、各高専1名ず つ)の技術職員が2~3日間の研修を受 講しました。

苫小牧高専との間では土木系の技術 職員が、旭川高専との間では機械系の 技術職員がそれぞれ派遣され、また函 館高専との間では、函館高専からは化 学・分析系の技術職員が、本学からは フィールド系の技術職員が機械系の研 修を受けるため派遣されました。

本研修では、事前に講師を担当する 技術職員と受講者の間で打合せを行 い、受講者が特に学びたい分野を重点 的に学べる研修プログラムが組まれ、 さらに施設見学や業務発表会、また両 機関の技術職員が交流を深めるための 情報交換会も行われるなど、充実した 研修となりました。

受講した各高専の技術職員からは、 今回学んだ専門的な知識や高い技術を 高専の学生に還元していきたいといっ た積極的な意見が聞かれ、本学の技術 職員からも、高専で行われている学生 実験や実習における高いレベルの指導 方法や安全教育を、学生実習などに役 立てていきたいという感想が聞かれま

した。

また、同じ専門分野の技術職員だけ ではなく、幅広い分野の技術職員と交 流することができ、今後、機器の共同 利用や設備・技術などに関する情報の 共有などで協力・連携していくための 繋がりを持つことができ、有意義な研 修であったという声も聞かれました。

スキルアップだけではなく、両機関 の連携を深める点でも大変有意義であ ったことから、両機関の受講者や関係 者からは、次年度も研修を継続してほ しいとの声があり、本事業の目的に寄 与できたことがうかがえました。

研修企画・実施スタッフ: 低温科学研究所 佐藤陽亮 工学研究院 中川直也 創成研究機構 武田希美 総務企画部情報企画課 財原昇平

(技術支援本部)



工学部での研修の様子



低温科学研究所での研修の様子



触媒科学研究所での研修の様子



函館高専での研修の様子

nano tech 2025に出展

産学・地域協働推進機構は、1月29 日(水)から1月31日(金)に東京ビッ グサイトで開催されたnano tech 2025 に出展しました。

この展示会は、「未来のビジネスを拓 く」をテーマに開催され、来場者は幅 広い産業分野におけるR&D (Research & Development) 関係者が占めること から、企業などで研究開発や連携先探 索に直接関わる方々に対し、研究シー ズをアピールする最適な展示会となっ ております。

本機構のブースでは、下記の五つの nano tech関連研究シーズの他、GXに関 連する12件の特許技術を展示しました。

- 1. 「MOFベース電極触媒の高速マイク 荻野 勲准教授
 - 2. 「マルチ元素ナノ酸化物の水中結晶 光合成」工学研究院附属エネルギー・ マテリアル融合領域研究センター 渡辺精一教授
 - 3. 「多環状トポロジカル高分子材料と 非ブリード添加剤としての応用」 工学研究院応用化学部門 佐藤敏文 教授
 - 4. 「自動反応最適化装置」理学研究院 化学部門 永木愛一郎教授
 - 5. 「固体触媒を利用したバイオマス由来 環状ジオールの合成」触媒科学研究 所触媒反応研究部門 中島清隆教授

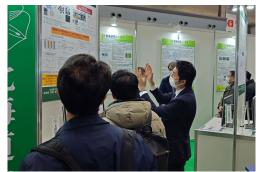
今年の全来場者数は、42,089名と前 口波改質」工学研究院応用化学部門 年を上回り、本機構のブースでは研究 者による技術紹介も行われるなど多く の方々に足をお運びいただき、研究 シーズに関する様々な議論や、共同研 究等に関する具体的な相談が行われま した。

> 産学・地域協働推進機構では、今後 も研究成果の社会実装を目的に、民間 企業等との様々なマッチングの企画を 行いながら、産学連携活動を推進して まいります。

> > (産学・地域協働推進機構)



産学・地域協働推進機構ブースの様子



来場者に説明する荻野准教授

「HACK FOR IMPACT: 共創で未来を生み出すハッカソン」を実施

産学・地域協働推進機構は、1月17 日(金)に、株式会社HBAと北海道未 来創造スタートアップ育成相互支援ネッ トワーク (HSFC) と協働し、「HACK FOR IMPACT: 共創で未来を生み出す ハッカソン」を開催しました。

本プログラムは、北海道内の高校 生、大学生、大学院生を対象とし、IT 技術を用いて身近な社会課題の解決方 法を考える1DAYのハッカソン型ワー クショップです。

当日は、アイデアソンパート、開発 パート、プレゼンパートと進行してい き、アイデアソンパートでは、身近な 社会課題の説明が書かれた「社会課題 カード」と解決策で活用できそうなIT 技術が書かれた「ITソリューションカ ード」をそれぞれ複数の中から選び、 社会課題の解決アイデアを考案しまし た。その後の開発パートでは、プログ ラミング等の専門技術を用いずにAIを 活用したアプリを作れるオープンソー スのプラットフォームである「Dify」 を活用し、さらに株式会社HBAのエ ンジニアのサポートも受けながらプロ トタイプを作成しました。最後のプレ ゼンパートでは、開発したプロトタイ プを実際に動かしながら、他の参加者 にアイデアを発表しました。

参加者からは、「短時間で実際にア プリを作るところまでできて良い経験 になった」「これからは技術だけでは

なく、社会課題にも目を向けてみよう と感じた」「アプリなど作ったことは なかったが、プロのエンジニアが丁寧 に教えてくれたおかげで、最後まで作 ることができた」などの声が寄せら れ、参加者にとって今後の活動のきっ かけをつくることができました。

産学・地域協働推進機構は今後も北 海道のアントレプレナーシップの涵養 に資するべく、地域の企業と協働し、 起業家人材の育成を目指すワークショ ップやプログラムを積極的に実施して まいります。

(産学・地域協働推進機構)

実施内容

日 時:1月17日(金)17:00~20:30

参加者:高校生、大学生、大学院生(計32名)

会 場:株式会社HBA創成イノベイティブオフィス



チームビルディングの様子



ハッカソンの様子



カードを使ってアイデアを広げる様子



プロのエンジニアによるサポートの様子

高校生向け起業体験プログラム「Startup Base U18 in札幌西高校」を実施

産学・地域協働推進機構は、1月14 日(火)から1月15日(水)に、株式 会社まつりばの協力のもと、高校生向 け起業体験プログラム「Startup Base U18 in 札幌西高校」を実施しました。 本プログラムには、北海道札幌西高等 学校の生徒35名が参加し、アイデア創 出からビジネスプランの発表までを体 験しました。

参加者は、それぞれ取り組みたいビ ジネスアイデアを考えることから始 め、その中から投票で選ばれたアイデ アを基に、チームビルディングを行い ました。今回選ばれたアイデアには、 「早朝から低額で利用できる自習室の

設営」「18歳未満の高校生でも単発バ イトができるサービス」「留学資金を 自分で集めるサービス」などがあり、 高校生が日常生活で感じる課題をビジ ネス視点で解決しようとする内容が多 く見られました。プログラムでは、道 内の起業家やビジネスの第一線で活躍 するメンターが、高校生たちのアイデ アをブラッシュアップする支援をし、 本学や藤女子大学等の大学生も進行役 として高校生をサポートしました。最 後に、各チームがアイデアを発展させ たビジネスプランをプレゼンテーショ ン形式で発表しました。

参加した高校生からは、「自分たち

のアイデアが形になる過程がとても楽 しかった」「大学生や起業家の方と話 すことで、新しい視点を得ることがで きた」といった感想が聞かれました。

産学・地域協働推進機構では、今後 も高校生が起業家精神を育み、地域や 大学との連携を深める機会を提供して いく予定です。今後は、さらに多くの 学校や地域での実施を目指し、より多 くの高校生がビジネスを通じて社会課 題に向き合う場を創出していきます。

(産学・地域協働推進機構)

実施内容

日 程:1月14日(火)~15日(水)

参加者:高校生35名

会 場:北海道札幌西高等学校



それぞれ考えたアイデアを発表する様子



起業家によるメンタリングの様子



チームでのディスカッションの様子



集合写真

「アントレまちなか留学」を開催

産学・地域協働推進機構は、1月7日 (火)から1月10日(金)に、HelloWorld 株式会社、北海道未来創造スタートアッ プ育成相互支援ネットワーク(HSFC) と協働し、「アントレまちなか留学」 を開催しました。

北海道内の高校生を参加対象とした 本プログラムは、外国人家庭にホーム ステイをしながらグローバルな視点を 養い、様々なワークショップを通じて アントレプレナーシップを学ぶことを 目的としています。

プログラムでは、少人数に分かれて 沖縄在住の外国人家庭にホームステイ し、海外留学で体験するような異文化

ップ等を通してアントレプレナーシッ プを学びました。ワークショップでは 「日本における多文化共生の課題を見 つけ、解決アイデアを考案する」をテ ーマに、チームで課題に対する解決策 を考え発表しました。高校生24名が参 加し、積極的なディスカッションが繰 り広げられ、国際的な視点からのアイ デアを考えました。またキャリア講話 として、沖縄を中心に活動する若手起 業家や学生起業家の話を聞き、アント レプレナーシップの機運を高めました。

参加者からは、「4日間を通して積 極性や挑戦することを学んだ」「他の

交流を行いながら、日中はワークショ アントレプレナーシップ教育プログラ ムにも参加したい」「ワークショップ で考えたアイデアを実現するために行 動したい」などの声が寄せられ、参加 者にとって今後の活動のファーストス テップになるきっかけをつくることが できました。

> 産学・地域協働推進機構は今後も北 海道のアントレプレナーシップの涵養 に資するべく、国際的な視野を持つ起 業家人材の育成を目指し、このような 交流型プログラムを積極的に実施して まいります。

> > (産学・地域協働推進機構)

イベント実施内容

日 程:1月7日(火)~1月10日(金) 参加者:北海道内の高校生24名

会場:Lagoon KOZA (沖縄市中央1-7-8)、沖縄在住の外国人家庭



ホストファミリーとの記念写真



多文化共生ワークショップの記念写真



ビジネスアイデアピッチの様子



集合写真

「科学と野球で学ぶアントレプレナーシップ〜科学実験・野球教室〜」を開催

産学・地域協働推進機構は、2月11 日 (火・祝) に長沼町立長沼小学校に て「科学と野球で学ぶアントレプレナ ーシップ~科学実験・野球教室~」を 開催しました。

積極性や挑戦心、チームワークなど のアントレプレナーシップ(起業家精 神)を身に付けることを目的とした本 イベントに、小学生6名と大学院生4名 が参加しました。

イベント前半の科学実験では、「暖 かい空気と冷たい空気の違いを知ろ う」「この技術はどのようなところで

活かされている?」等をテーマとし て、大学院生が小学生にわかりやすく 説明し、意欲的に実験に取り組んでい ました。後半の野球教室では、大学院 生の指導のもと、キャッチボールやバ ッティング練習を行い、その後に試合 形式で野球を行いました。初めて野球 に挑戦する参加者もいましたが、大学 院生が丁寧に指導し、ゲームが進むに つれてどの参加者も積極的にボールを 追う姿が見られ、チームの仲間との関 わり合いも楽しむ様子がありました。

参加した小学生からは「野球は初め

て挑戦したけど、打てるようになって 嬉しかった」「これからも色々なこと にチャレンジしてみたい」といった感 想が聞かれました。また、科学実験と 野球教室の企画や指導は大学院生が中 心となって実施し、大学院生にとって も貴重な経験となりました。

産学・地域協働推進機構は今後も、 地域と連携し、子どもたちが楽しみな がらアントレプレナーシップを学べる 活動を積極的に展開していく予定です。

(産学・地域協働推進機構)

実施内容

日 程:2月11日 (火・祝)

参加者:小学生6名、大学院生4名 会 場:長沼町立長沼小学校



アントレプレナーシップに関するレクチャー



バルシューレを活用した準備運動



科学実験の様子



野球教室の様子

「学校EXPO in新宿髙島屋」に出展

2月1日(土)、2日(日)に東京オ フィス、産学・地域協働推進機構産学 連携推進本部及び同機構スタートアッ プ創出本部は、「学校EXPO in新宿髙 島屋」に出展しました。このイベント は、食品業界、アパレル産業、化粧品 業界の未来を担う人材・次世代の業界 人を応援するプロジェクトとして、髙 島屋が企画したものです。

本学は、産学連携推進本部が行って いる北大ブランドの取り組み及びスタ ートアップ創出本部が行っている北大 発認定スタートアップ企業の取り組み

を融合させ、「北大発認定スタート アップ企業関連の北大ブランド認定商 品」というテーマで出展しました。あ わせて、創基150周年記念事業の紹介 と同事業への支援依頼を行いました。

当日はポスター展示をはじめ、北大 発認定スタートアップ企業の株式会社 わっか、学生が起業した株式会社パイ オビア及びダイナメゾンに協力いただ き、北大ブランド認定商品や北大発認 定スタートアップ企業の商品を販売し ました。来場したお客様の中にはご子 息・ご息女が本学の受験生の方や卒業

生が来場し、商品はもちろん、配布し た創基150周年記念ファイルも好評で した。

このイベント出展を機に本学の「創 基150周年記念事業」「北大発認定ス タートアップ企業関連の北大ブランド 認定商品」というテーマに、首都圏の 方にも幅広く関心をもっていただくこ とができました。

(産学・地域協働推進機構)



多くのお客様で賑わう北海道大学ブース

米国マサチューセッツ大学アマースト校とシードファンドを開設

北海道大学は、戦略的国際パートナ -校である米国マサチューセッツ大学 アマースト校 (UMass Amherst。以 下、UMA)と共同研究分野の裾野を広 げることを目指し、共同出資で研究者 のモビリティを支援する「HU-UMA Joint Research Seed Fund (HU-UMA 共同研究シードファンド)」を開設しま した。初年度となる令和7年度の申請 には、「先端材料」「応用生命科学」 「再生農業」「持続可能性」「人文学 と社会」のいずれかのテーマに係る共 同研究へ繋がる申請を募集し、本学か ら9件、UMAから8件、計17件の申請 がありました。

17件のうち、「機械的環境における 集団的細胞移動制御」「高分子の持続

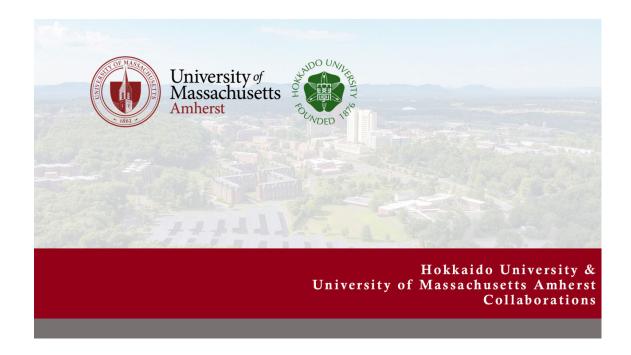
可能な合成」「超高速DSCを用いた、 ガラス化するハイドロゲルの熱分析; 工業用リグニンヒドロゲルに由来する 多元素ドープ多孔性炭素材料開発」 「持続可能な養殖と魚類保全のための 応用保全内分泌学の推進:サケ科魚類 の下垂体ホルモン分泌に対する光の直 接作用;養殖魚と天然魚のストレス及 び成長マーカーの有効性」「海洋生物 多様性の保全と沿岸生態系の持続可能 な利用の両立: UMAグロスター及び 北大厚岸臨海ステーション連携」「持 続可能なブルーベリー生産のための AI駆動精密農業:ディープラーニン グによる成長、収量、品質、最適収穫 時期予測」「1945-47年に博多港を通

過した帝政末期の移民に係る都市史と

トランスナショナル史の文脈からの分 析」「帝政以後の政治的生態系:20世 紀の中東における米国とソ連の覇権の 興亡」の8件の研究申請を、両校で合 わせて採択しました。

選出された申請からは、両校の強み である研究室ベースの高分子工学、 フィールドを使った農学、環境科学か ら現代日本学、境界研究まで、若手研 究者が研究代表者となっているものも 含め、二大学間で幅広い分野の潜在的 な連携可能性があることが示されまし た。両校の研究連携加速が期待され ます。

(国際連携推進本部、研究推進部研究振興企画課)



SDGs北海道セミナー2025を開催

本学、北海道及びJICA北海道が主 催して、1月28日(火)に「SDGs北海 道セミナー2025」を学術交流会館を会 場としてハイブリッド開催し、本学学 生、教職員及び一般市民約200名が参 加しました。

本セミナーは、本学と北海道との間 で、令和3年4月に締結した包括連携協 定に基づく取組の一つです。本協定 は、本学の知見と北海道のネットワー クを活用しながら相互に協力し、SDGs の推進、人材育成及び地域社会の振興 に寄与することを目的として締結した ものです。

出村 誠総長特命参与による開会挨 拶の後、中村健吾広報・社会連携本部 特任准教授が「教育を起点にみんなで つくる新たな地域・社会~課題先進地 の地域だからできること~」と題して 基調講演を行いました。中村特任准教 授は、子どもたちの個性や能力を伸ば し、豊かな心を育む上で、地域社会の 多様性(人、コミュニティ、自然、歴 史、文化、伝統行事、産業など)を活 かした学びの場を設定し、世代等が異 なる多様な人々との出会いや交流、体 験活動の機会を提供することが重要で あると述べました。

引き続き行われたトークセッション では、日本各地で特色ある学びを推進 する4人のパネリストから、最先端の 学びや教育を起点とした新たなまちづ くりなどについての話題提供があった 後、「持続可能な地域の学校・教育」 の在り方についての議論が行われま した。

最後に、北村英則北海道総合政策部 長が閉会挨拶を行い、本セミナーは終 了しました。

(サステイナビリティ推進機構)

日 時:1月28日(火)14:00~16:00

形 式:ハイブリッド開催

会 場:北海道大学学術交流会館 オンライン:Zoomウェビナー

プログラム:基調講演「教育を起点にみんなでつくる新たな地域・社会〜課題先進地の地域だからできること〜」

講師:北海道大学 広報·社会連携本部 社会連携部門 中村健吾 特任准教授

トークセッション

ファシリテーター:中村健吾 特任准教授

パネリスト講師:大辻雄介氏(北海道大空高等学校 校長)

宇井直樹氏 (鹿追町教育委員会 学校教育課長)

安井早紀氏(東川町 School for Life Compath 共同代表)

鈴木元太氏(島根県立津和野高等学校(地域みらい留学参画校)卒業生)

主 催:北海道大学、北海道、JICA北海道



開会挨拶を行う出村総長特命参与



トークセッションの様子(左から宇井氏、大辻氏、鈴木氏、安井氏)



基調講演を行う中村特任准教授



閉会挨拶を行う北村総合政策部長

「国民との科学・技術対話」支援事業 アカデミックファンタジスタ 講師が講義、見学を実施

大学での学びや最新の研究についての講義を受講した生徒、及び教員の皆様から、講義レポートが届きましたのでご紹介 します。

「ジェンダーの視点でみる労働の世界」 教育学研究院 教授 駒川智子

受講した生徒たちは、日本がジェン ダー平等を実現するために解決すべき 問題である、無意識の偏見や固定観 念、女性管理職の少なさがキャリア選 択に与える影響について、興味深く聴 講していました。また、若者が社会の

意識を変えられる存在であると感じ、 「男女が平等に活躍できる社会を目指 す重要性を再確認した。何か行動に移 していきたい | と意欲を示していま した。



時:2024年11月1日(金)13:30~14:50 \exists

場:市立札幌藻岩高等学校

参加生徒:1-2年生 29名

「魚の感染症の診断、予防および治療」 水産科学研究院 教授 笠井久会

受講した生徒からは、「今まで魚の 病気について深く考えたことがなかっ たので、新鮮な気持ちで先生のお話を 聞きました」や、「途中で生物の授業

で勉強中の内容が出てきたので、今学 んでいることがこのような学問に実際 にいきてくるんだと思いワクワクしま した」との声が聞かれました。



時:2024年11月2日(土)11:35~12:20 Н

場:遺愛女子中学校・高等学校

参加生徒:1年生 19名

「陽子ビームを使ったがん治療」 工学研究院 教授 松浦妙子

受講した生徒達からは、「がんの治 療法には医療だけではなく他分野との 関連がとても大事であることを学ん だ」「今学んでいる物理の内容が大学 での学びや、研究にどのようにつなが

るかが理解できて、進学への意欲が高 まった」などの声が寄せられ、物理現 象に対する理解を深め、ますます興味 を持ったことが伺えました。



時:2024年11月6日(水)1回目13:05~14:05/2回目14:45~15:45 \exists

場:市立札幌新川高等学校

参加生徒:1-2年生 1回目 37名/2回目 37名

「『私』の行為に潜む『他者』の影響」 教育学研究院 教授 阿部匡樹

受講した生徒からは、「実験やアン ケートが多く用意されていて、常に面 白く受講できました」や、「各テーマ についてデータや実験で得られた結果 を解析、説明するという流れで、わか りやすく、ためになる話を聞くことが

できました」「自分たちにとってとて も身近なことについて教えていただ き、私生活における新たな視点を見出 すことができました | などの声が寄せ られました。



時:2024年11月13日(水)1回目13:20~14:10/2回目14:20~15:10 日

場:北海道札幌国際情報高等学校 参加生徒:2年生 1回目 34名/2回目 36名

「未来社会を考える一大学での学びと研究一」 大学院教育推進機構 教授 宮本 淳

生徒からは「普段は触れることのな い分野や学問について知ることができ ました。自分の進路や将来について改 めて考えたいです」との声や、「いろ んな物事に興味をもち、失敗を恐れず に挑戦することの大切さを学べて、と

ても有意義な時間をすごせました」 「マジカルバナナの話が印象的で、物 事を考えるときに抽象化するという新 たな視点が生まれ、充実した時間とな りました」などの感想が寄せられま した。



日 時:2024年11月13日(水)1回目13:20~14:10/2回目14:20~15:10

会 場:北海道札幌国際情報高等学校

参加生徒: 2年生 1回目 15名/2回目 16名

アカデミックファンタジスタとは?

北海道大学の研究者が知の最前線を 出張講義や現場体験を通して高校生な どに伝える事業、「アカデミックファン タジスタ (Academic Fantasista)」。 内閣府が推進する「国民との科学・技 術対話」の一環として、北海道新聞社 の協力のもと2012年から継続的に実施 しています。今年度は北海道の高校等 を対象に29名の教員が講義を実施して います。

北大の研究を発信するウェブマガジ ン「リサーチタイムズ」や、Facebook でも講義レポート等を随時更新中で す。こちらもぜひご覧ください。

・リサーチタイムズ

https://www.hokudai.ac.jp/researchtimes/ academic-fantasista/

· Facebook @Hokkaido.univ.taiwa

(広報・社会連携本部)





Facebook

■部局ニュース

理学院物性物理学専攻と国立台湾成功大学理学院物理学系が ダブル・ディグリー・プログラムの覚書の細則を締結

2月21日(金)、理学院物性物理学専 攻と国立台湾成功大学理学院物理学系 との間で、ダブル・ディグリー・プロ グラム (以下、DDP) 覚書の細則署 名式が、国立台湾成功大学のキャンパ スで行われました。署名式には、本学 からは柳澤達也物性物理学専攻長、河 村 裕国際化支援室室長、国立成功大 学からは羅 光耀物理学系主任、蔡 錦俊理学院長ほか両校の関係者20名が 出席しました。平成29年6月に両校の 理学院で既にDDP制度を締結していま すが、物理系専攻間で具体的な単位変

換やダブルディグリー申請を行うため の細則を締結するのは初となります。

国立成功大学は戦前の昭和6年に、 台湾南部の台南に設立された台湾総督 府台南高等工業学校を前身に持ち、戦 後、台湾省立工学院、台湾省立成功大 学と名を変え、昭和46年から国立成功 大学となりました。学部は全部で12学 部、2万人を超える学生を有する総合大 学であり、医学部と理系の学部が特に 有名です。令和4年の世界大学影響力 ランキングでは33位の評価を受けた、 世界的にも有力な大学の一つです。

今後、理学院物性物理学専攻と国立 成功大学理学院物理学系の間では、 短期の学生派遣・受入れによる交流 や、北海道大学短期留学プログラム (HUSTEP)、Hokkaidoサマー・イン スティテュート等のプログラムを通じ て、教育研究における連携を深めてい く予定です。

本細則の締結により、物性物理学分 野における、両大学の更なる教育・研 究交流の推進が期待されます。

(理学院)



署名後の羅物理学系主任(左)と 柳澤物性物理学専攻長(右)



関係者による記念写真



シンポジウムで留学生のリクルーティングを行う 河村室長と柳澤専攻長

先端生命科学研究院ソフトマター国際連携ユニット(SMCR)が LeNet 国際シンポジウム「Low Entropy Soft Matter」を開催

先端生命科学研究院ソフトマター国際連携ユニット(SMCR)では、2月12日(水)から2月14日(金)に学術交流会館で国際シンポジウム「Low Entropy Soft Matter」を開催しました。海外からの世界第一線で活躍する招待講演者3名を含め、3日間を通じて20名の著名な講師が講演を行い、のべ172名が参加しました。

本シンポジウムは、JSPS国際先導研 究プロジェクト「低エントロピー高分 子網目材料の設計と機能創出-LeNet-」メンバーによる進捗報告及び招待講演者からの最先端の研究事例の紹介などを通じて、低エントロピー高分子ネットワークの魅力、可能性、将来について多角的に議論することを目的として開催されました。会期中には総合イノベーション創発機構化学反応創成研究拠点(WPI-ICReDD)との共催でICReDDセッションも行われ、国内外の研究者間で低エントロピー高分子ネ

ットワークについて様々な対話を実施 することができました。

また、2日目に行われたポスターセッションでは本学生命科学院ソフトマター専攻の学生及び研究者41名によるポスター発表が行われ、若手研究者の研究交流と活動の場を広げる有意義な機会を提供することができました。

(生命科学院・先端生命科学研究院)

講演者一覧

2月12日 (水)

- · Costantino Creton (ESPCI Paris-PSL, France)
- · Shohei Saito (Osaka University)
- · Fumitaka Ishiwari (Osaka University)
- · Evelyne van Ruymbeke (Université catholique de Louvain, Belgium)
- · Mikihiro Hayashi (Nagoya Institute of Technology)
- · Xiang Li (Hokkaido University)
- · Naoyuki Sakumichi (The University of Tokyo)
- · Naoko Yoshie (The University of Tokyo)

2月13日 (木)

· Tetsuya Yamamoto (Hokkaido University)

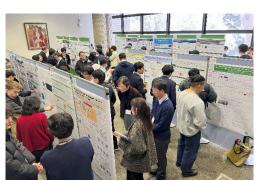
- · Gumi Wei (Hokkaido University)
- · Zhijian Wang (Hokkaido University)
- · Tasuku Nakajima (Hokkaido University)
- · Jan Genzer (NC State University, USA)
- · Takayuki Nonoyama (Hokkaido University)
- · Takashi Hiroi (Shibaura Institute of Technology)

2月14日 (金)

- · Kenji Urayama (Kyoto University)
- · Koichi Mayumi (The University of Tokyo)
- · Tsutomu Indei (Hokkaido University)
- · Takayuki Kurokawa (Hokkaido University)
- · Takamasa Sakai (The University of Tokyo)



参加者全員による記念撮影



ポスターセッションの様子

令和7年度薬学実務実習開始セレモニーを挙行

薬学部では、2月12日(水)に令和7 年度薬学実務実習開始セレモニー「臨 床現場へあがるための心得」を挙行し ました。

この式は、薬学科学生が実務実習 (病院実習・薬局実習) に臨むにあた り毎年実施しているもので、学生は引 き締まった面持ちで参加していました。 式には、木原章雄薬学部長、小林正 紀教務委員長、実務実習担当教員らが

出席し、実務実習の趣旨や学生に期待 すること、今年度実施された実務実習 をふまえての注意点などとともに、激 励の言葉が伝えられました。

受入施設からは、北海道大学病院薬 剤部の武隈 洋副部長、株式会社アイ ンホールディングスの郡川道子氏、株 式会社ツルハの中村文哉氏、株式会社 なの花北海道の井野千枝子氏が出席 し、臨床の現場・患者さんに自ら接す

る場で実習に臨む際の心構えなどが学 生たちに伝えられました。

また、木原薬学部長から学生一人ひ とりへ実習中着用するネームプレート が手渡され、病院・薬局合わせて5か 月に及ぶ実習への壮行となりました。

(薬学研究院・薬学部)



激励の言葉をかける武隈副部長



ネームプレートを手渡す木原薬学部長



熱心に聞き入る学生たち

総合化学院と国立陽明交通大学理学院がダブルディグリープログラムを締結

2月10日(月)、総合化学院と国立陽 明交通大学理学院は、国立陽明交通大 学(台湾)において、ダブル・ディグ リー・プログラム(以下、DDP)の締 結式を執り行いました。本プログラム は、両大学の大学院生が相互に学位取 得の機会を得ることを目的とし、国際 的な研究者の育成を推進するものです。

締結式では、本学の忠永清治総合化 学院長と国立陽明交通大学のジウン・ タイ・チェン理学院長の両者が協定書 に署名し、合意が正式に成立しました。

国立陽明交通大学は、令和3年に国立 陽明大学と国立交通大学が合併して名 称が変更となりましたが、本学とは名 称が変更される前の平成25年に大学間 交流協定を締結し、電子科学研究所、

工学研究院、医学研究院、歯学研究 院、薬学研究院を中心として、10年以 上にわたる研究交流を続けており、両 大学間には強固な学術的繋がりが築か れています。また、半導体分野におい ては、既に研究協力体制を構築してお り、令和6年6月には両大学間で正式な 協定が締結されています。

総合化学院においても、令和元年に 両大学で大学院講義の単位互換を行 い、令和4年以降はHokkaido サマー・ インスティテュート (HSI) に毎年講 師を招いて学生の学びや人的交流の場 を提供するなど、積極的に国際交流を 進めています。これにより、学術的な ネットワークはさらに広がり、国際的 な視野を持つ研究者の育成に繋がりま

した。

今回のDDPは、総合化学院との部局 間協定における、AGH科学技術大学 (ポーランド)、モントリオール大学 (カナダ)、国立台湾大学(台湾)、国 立清華大学(台湾)及び南京大学(中 国) に続いて、六つ目の締結となりま した。

今後、さらに総合化学院を通じた教 育・研究の国際化の進展により、化学 分野における学生の交換が活性化し、 国際的な視野を持つ研究者の育成が促 進されることで、本学全体の将来的な 学術的発展に大きく寄与することが期 待されます。

(総合化学院)



協定書を持つ忠永学院長(左)とチェン学院長(右)

令和6年度農学研究院FD研修会を開催

農学研究院では、2月4日(火)に令 和6年度 FD研修会を開催しました。 今回は、北方生物圏フィールド科学セ ンター静内研究牧場の河合正人准教授 が「静内研究牧場におけるフレッシュ マンセミナーへの取り組み」というテ ーマで講演を行いました。

本研修会は野口 伸農学研究院長に よる開会挨拶の後、園山 慶農学研究 院教務委員会委員による司会の下、河 合准教授による講演とその後の質疑応 答、という流れで進められました。参 加者は60名に上り、農学研究院の教員 からの高い関心がうかがえました。

河合准教授は、高等教育推進機構が 授業アンケートの結果に基づいて選定 する「エクセレントティーチャーズ」 にこれまで3度選ばれており、うち令和 4年度にはベスト・エクセレントティー チャーに選出されています。今回の研 修会では、担当科目である「一般教育 演習 (フレッシュマンセミナー):牧 場のくらしと自然」の実施状況や、講 義における創意工夫について紹介しま 1.7-

講演の冒頭では、静内研究牧場の沿

革や、牧場としての特殊性について説 明がありました。静内研究牧場は、造 成時にあえて傾斜地を残し、全体の約 7割を森林として維持するなど、一般 的な牧場とは異なる地形を有していま す。また、畜産面では放牧が行われて おり、肉用牛よりも乳牛の割合が多い ことや、牛の自然交配が実施されてい ることが全国的にも珍しい点として紹 介されました。このような静内研究牧 場の特殊性を学ぶことで、履修者は逆 に、一般的な牧場の在り方について気 づきを得ます。牧場はイメージしやす い存在であるからこそ、異なる事例に 触れることで知的な刺激を受ける機会 となります。河合准教授の「(研究活 動においても)一つの視点だけでは不 十分であり、比較することで理解が深 まる | という考えを伝える上で、静内 研究牧場は優れた学習環境であり、貴 重な教材であると認識しました。

後半では、多くの写真を交えなが ら、実際の講義内容について説明しま した。5日間の宿泊型実習では、家畜 に関する学びにとどまらず、放牧地と して利用している森林の植生調査や土

壌調査、牧場内に生息する野生動物の 生態観察なども実施しています。ま た、動物心理学の専門家を交えるな ど、多分野とのコラボレーションを通 じて、学際的な教育が展開されている ことが紹介されました。さらに、実習 だけでなく、ミニレクチャーを加える ことで学生の学びを深めている点につ いても指摘がありました。最終日に行 われた班ごとの研修成果発表では、単 に学生にテーマ設定を任せるのではな く、あえてパソコンを使用したプレゼ ンテーションを控えさせることで、 「聴衆に興味を持ってもらえる発表と は何か」を熟考させる工夫もなされて いました。

今回の研修会で紹介した内容は、実 習科目の多い農学部においても応用で きる点が多く、今後の教育活動を改善 する上で貴重なヒントとなりました。 この場をお借りし、厚く御礼申し上げ ます。

(農学院・農学研究院・農学部)



河合准教授の講演の様子



FD研修会の様子

北海道札幌北高等学校が遺伝子病制御研究所にて職場体験プログラムを実施

1月7日(火)、北海道札幌北高等学 校の1年生32名が遺伝子病制御研究所 を訪問しました。本訪問は同校の希望 によるもので、医学、生命科学分野へ の興味を深め、将来の進路選択の参考 にすることを目的とした、職場訪問の 一環として実施されました。

当日はまず所長である村上正晃教授 より、研究所の概要説明が行われまし た。約15分間の説明を受けた後、生徒 たちは九つの異なる研究分野の研究室 に分かれ、それぞれの研究テーマや実 験手法について学びました。

各研究室では、教員や研究スタッフ の指導のもと、生徒たちは多様な研究 内容に触れました。細菌やウイルスな どの病原体の感染メカニズム、それに 対する免疫の働き、病原体によるがん 化のメカニズム、タンパク質やオート

ファジーの研究、線虫の胚発生や組織 形成の観察、バイオインフォマティク スとゲノムの3次元構造、さらには「病 は気から」というテーマのもと、スト レスが身体に及ぼす影響について、そ れぞれ熱心に耳を傾けながら講義を受 けました。

また、体験実習として、フローサイ トメトリーを用いた免疫細胞の解析、 DNA抽出やPCR法を用いた遺伝子解 析、タンパク質の解析、クリーンベン チでの細胞の培養・維持作業、顕微鏡 による細胞の形態観察、撮影した顕微 鏡写真からの簡単な3Dモデルの作成 と細胞の詳細な立体的観察、組織標本 の観察、オートファジーの可視化、線 虫の遺伝子変異による形態や運動の変 化の観察、蛍光タンパク質の観察、及 びパソコンを用いたバイオインフォマ

ティクス解析の実習などが行われま した。

さらに、最新技術や研究機器の紹介 もあり、生徒たちは最先端の科学に直 接触れる貴重な機会を得ました。各研 究室にて、生徒たちはそれぞれの研究 分野を体験することで、基礎科学の重 要性や研究の魅力を実感し、活発な質 問が飛び交いました。

今回の職場訪問を通じて、生徒たち は医学、生命科学研究の現場を身近に 感じることができました。本訪問が生 徒たちの将来のキャリア選択に役立つ ことを期待するとともに、本研究所で は、今後もこのような機会を継続して 提供してまいります。

(遺伝子病制御研究所)



説明を受ける生徒たちの様子

人獣共通感染症国際共同研究所、総合イノベーション創発機構ワクチン 研究開発拠点ディスティングイッシュトプロフェッサーの鈴木定彦教授が タイ王国ラーマ10世からタマサート大学名誉博士号を授与

鈴木定彦教授(人獣共通感染症国際 共同研究所・総合イノベーション創発 機構ワクチン研究開発拠点ディスティ ングイッシュトプロフェッサー)が、 タイ王国のラーマ10世からタマサート 大学名誉博士号を授与されました。

タイのタマサート大学名誉博士号と は、各学問分野において顕著な業績を あげ、タイの学術の発展に寄与した者 に付与されるものであり、毎年若干名 が授与されます。今回は、2月1日(土)

に同大学で授与式が開催されました。

公衆衛生学への貢献に対するもので、 結核及び薬剤耐性菌の研究において、 タイとの共同研究を通じて原著論文を はじめとする数多くの業績を上げたこ 課程に多くの学生を受け入れ、タイの 細菌学分野研究者人材を育成したこと を通じて、タイの公衆衛生向上に寄与 したことが高く評価されました。

鈴木教授のタイにおける名誉博士号 鈴木教授への授与は、タイにおける の授与は、令和4年のマヒドン大学名 誉博士号に続いて、2回目となります。 平成12年に初めてタイにおいて講義を して以来、タイの大学並びに国立研究 所と数多くの共同研究を実施し、業績 と、並びに、タイより本学大学院博士 を上げてきたことが今回の名誉博士号 授与に繋がりました。

(人獸共通感染症国際共同研究所)



タマサート大学名誉博士号を授与される鈴木教授



主な参加者による記念撮影

北方生物圏フィールド科学センター研究林が中川町のきこり祭に初出展

北方生物圏フィールド科学センタ -森林圏北管理部と包括連携協定を 結んでいる中川町において、2月23日 (日・祝) に第10回きこり祭が開催さ れ、北方生物圏フィールド科学センタ ー研究林が初出展しました。

北管理部ではマーケットブースにお いて研究林の活動を宣伝しました。今 回は火起こし体験、箱の中身当てクイ ズ、ワークショップ(森のハンドメイ

ド、バードコール作り、電熱ペンでお えかき)、ポスター発表、木工品販売 を通じて研究林の活動をアピールしま した。

ワークショップでは延べ32組の参加 者があり、普段木に触れることの多い からも研究林の魅力や重要性を発信す 中川町の皆さんにも新たな体験や学び を提供することができたという実感がと考えています。 ありました。

木工品販売についても、延べ17名の

方にご購入いただき、研究林スタッフ の日頃の作業を見ていただく貴重な機 会になったことと思います。

今回は北管理部スタッフ及び兼任ス タッフを中心に対応しましたが、これ る窓口としての役割を担っていきたい

(北方生物圏フィールド科学センター)



出展ブースの様子



火起こし体験の様子



ワークショップの様子

環境健康科学研究教育センターが公開セミナーを開催

環境健康科学研究教育センターは、 1月20日(月)に中央キャンパス総合 研究棟1号館において、公開セミナー を開催しました。

本セミナーでは、カリフォルニア大学 サンフランシスコ校教授のジャネット・ ウォシッキー教授を講師にお招きし、

Prognostic Modeling for Childhood Obesity」と題して講演を行いました。

ウォシッキー教授は小児科医で、子 ども達の肥満増加予防を目的に、リス クスコアモデルを作成しました。リス クスコアとは、例えば出生時の体格、

母親の年齢などの幾つかの該当項目を 使って、将来、子どもが肥満になるリ スクを予測するものです。

作成されたリスクスコアモデルは、 米国の子どものデータを用いていたこ とから、このモデルが日本の子どもに も当てはまるかを検討したいとのこと で、本センターが取り組んでいる北海 道スタディ(環境と子どもの健康に関 する研究) に連絡がありました。

北海道スタディは、北海道の約2万 人の母子を20年以上追跡し調査を行っ ているコホート研究です。本セミナー では、北海道スタディのデータを用い て、作成したリスクスコアが日本の子 どもにも適応できるか、妥当性を検証 した成果を紹介いただきました。共同 研究を開始してデータを提供後、新型 コロナウイルスの感染拡大により来学 が叶わずにおりましたが、この度実現 したものです。

講演の後はディスカッションを行い ました。今後、さらなる研究交流を進 めていく予定です。

(環境健康科学研究教育センター)



ディスカッションの様子



集合写真

■表敬訪問

海外

年月日	来 訪 者	来訪目的
7.2.5	ボゴール農業大学(インドネシア共和国) Arif Satria 学長	今後の交流に関する懇談
7.2.14	北極圏大学(フィンランド共和国) Outi Snellman 事務局長	今後の交流に関する懇談
7.2.26	淡江大学(台湾) 葛 煥昭 学長	今後の交流に関する懇談



Outi Snellman 北極圏大学事務局長(中央左)



葛 煥昭 淡江大学学長(中央左)

(国際部国際連携課)

■定年を迎えるにあたって

本年3月31日限りで定年を迎える方々のお言葉と略歴を紹介します。

法学研究科教授

池田 清治 氏



昭和59年3月に小樽商科大学を卒業し、翌4月に本学大学 院に進学してから、早いもので41年経ちます。本学には、 大学院生として5年、助手、助教授、教授として36年お世 話になりました。その間、先生方や同僚、そして、事務の 方々に大変なご高配をいただき、また学生の皆様からも多 くのことを学ばせていただきました。平成16年の法科大学 院の設置、部局長在任時の新型コロナ等、様々な事象に翻 弄されましたが、皆様のおかげで乗り切ることができまし た。心より御礼申し上げます。

まだ助手の時、さる先生の退職記念パーティーがあり、 名誉教授でいらした先生が「現役のみなさんからすると、 定年退職者など墓場に向かっているようにしか見えないか もしれないが、私たちからすると、新入生を迎える気分 だ」と挨拶なさったのを覚えています。生来の新しもの好 きなのか、今も過去を振り返る気持ちはあまりなく、むし ろ「4月からは再雇用の1年生、再雇用が終わった後は次な るステージの1年生 | と興味津々、新しいチャレンジを楽 しみにしています。

北大も進歩と深化を続け、新しいステージを迎えること でしょう。皆様のご健勝と自由闊達で未来を切り拓く北大 のますますのご発展をお祈りしております。

略歴

生 年 月 日 昭和36年12月1日

昭和59年 3月 小樽商科大学商学部卒業

北海道大学大学院法学研究科修士課程修了 昭和61年 3月

北海道大学大学院法学研究科博士後期課程退学 平成元年 3月

平成元年 4月 北海道大学法学部助手

平成 3年 3月 法学博士 (北海道大学)

平成 3年 8月 北海道大学法学部助教授

平成12年 4月 北海道大学大学院法学研究科助教授(組織変更による配置換え)

平成15年 4月 北海道大学大学院法学研究科教授

平成24年 4月7 北海道大学大学院法科大学院長(法律実務専攻長)

平成26年 3月 北海道大学大学院法学研究科副研究科長

平成26年12月 平成28年12月 北海道大学大学院法学研究科評議員代理

平成28年12月7 北海道大学教育研究評議会評議員

平成30年12月」北海道大学大学院法学研究科副研究科長

平成30年12月7 北海道大学教育研究評議会評議員

令和 2年12月[「]北海道大学大学院法学研究科長·法学部長

水産科学研究院教授

いさお 工藤 勲 氏



学生時代の9年と教員としての38年、計47年、北大にお世 話になりました。助手として採用されてからの18年は函館 キャンパスが勤務地でした。ところが平成17年に学院・研 究院構想の最初の学院として誕生した環境科学院に水産学 部から4名の教員が参画することになり、ラボ、学生と共に 札幌キャンパスに引越をしてきてから20年が過ぎました。

札幌在勤の水産教員として、総合教育部の1年生担任、 学部相談員等の職務を分担してまいりました。研究面では 海洋環境科学を専門として海洋生態系の基盤を成す植物プ ランクトンの基礎生産環境に関する研究を行ってまいりま した。北海道は四方を海に囲まれ、それぞれの海域は異な る特徴を持っています。北大には「おしょろ丸」と「うし お丸」の二隻の練習船があり、これらを利用してフィール ド科学の醍醐味を堪能させてもらいました。

今後はこれまでに経験したことのないような地球環境の 激変が予想されています。海洋環境及び海洋生態系がどの ように変化するのか練習船を活用した調査研究が益々重要 になると予想されます。最後になりますが、これまで多く の教職員、学生の皆様には大変お世話になりました。これ からも日本を代表する基幹大学として北海道大学の益々の 発展を祈念しております。

略歴

生 年 月 日 昭和35年1月24日

昭和57年 3月 北海道大学水産学部卒業

昭和59年 3月 北海道大学大学院水産学研究科修士課程修了

昭和62年 3月 北海道大学大学院水産学研究科博士後期課程単位修得退学

昭和62年 4月 北海道大学水産学部助手

平成元年12月 水産学博士(北海道大学)

平成12年 4月 北海道大学大学院水産科学研究科助教授

平成17年 4月 北海道大学大学院水産科学研究院助教授

平成19年 4月 北海道大学大学院水産科学研究院准教授

平成28年 4月 北海道大学大学院水産科学研究院教授

孝文

氏

理学研究院教授

北



平成5年5月に、縁あって北海道大学に着任いたしまし た。それ以来、約32年、豊かな自然に恵まれた札幌キャン パスで、思う存分、好きなテーマを選んで研究を行うこと ができたことは、この上なく幸せなことであったと思って おります。

平成10年頃からは、自分で納得できる研究もできるよう になりました。丁度その折、平成12年から同13年には、物 理学科構成員の支援と山田科学振興財団の援助を受けてド イツに1年間滞在し、研究三昧の生活を送りました。ま た、週末や夏冬の休暇には、車で遠出してあちらこちらを 見てまわり、ヨーロッパ生活を満喫しました。この経験 は、その後の私の研究と生活両面において、かけがえのな いものとなりました。

そして、定年前のこの10年間は、本当に充実した研究者 人生を送ることができました。研究者としてのレベルの向 上が実感でき、研究室にも優秀な学生が数多く入ってきて 良い研究を行ってくれ、物理学に関する著書も数多く世に 出すことができました。このような環境を与えていただい た北海道大学に心より感謝し、良い研究環境が保たれてい くことを切に希望いたします。ありがとうございました。

略歴

生 年 月 日 昭和34年4月

昭和57年 3月 東京大学工学部卒業

昭和59年 3月 東京大学大学院工学系研究科修士課程修了

東京大学工学部助手 昭和60年10月 工学博士 (東京大学) 昭和63年 2月

昭和63年 4月 東京大学物性研究所助手

平成 5年 5月 北海道大学理学部助教授

平成 7年 4月 北海道大学大学院理学研究科助教授 北海道大学大学院理学研究院助教授 平成18年 4月 平成19年 4月 北海道大学大学院理学研究院准教授 令和 2年 8月 北海道大学大学院理学研究院教授

理学研究院教授 根本 幸児 氏



北海道大学理類募集最後の年に入学して以来、大学院を 含め学生として9年、それから数年を経て教員として31年の 計40年間、北大の多くの方々に大変お世話になりました。

物理学科の卒研配属先であった物性理論研究室で恩師の 髙山 一先生に「スピングラス」の面白さを教えていただ いたのが研究の出発点でした。自分の脆弱な知識をもとに 臆面もなく先生と対等に議論を交わしていたつもりになっ ていた学生時代は、今振り返ると一番充実していた研究時 期と感じています。研究の真の楽しさを教えていただいた 先生には感謝し尽くせません。教員となり学生と対等のス タンスで議論しているときも、その頃の自分を思い出して は面映い気持ちになったものです。

教員として戻ってきてからも、同僚の諸先生に支えられ ながらなんとか教育研究を続けることができました。ま た、学部・大学院の教務にも携わらせていただき、関係す る先生方及び学務班をはじめとする事務方の皆様にも大変 お世話になり感謝しております。

北大の緑豊かなキャンパスを散歩するだけで気持ちが晴 れやかになりました。今後ともこの素晴らしい環境の中、 新時代を切り開きフロンティア精神を育む大学として発展 していかれることをお祈りいたします。

略歴

生 年 月 日 昭和35年3月1日

昭和57年 3月 北海道大学理学部卒業

昭和62年 3月 北海道大学大学院理学研究科博士後期課程修了

昭和62年 3月 理学博士(北海道大学)

昭和62年 4月 京都大学基礎物理学研究所基礎研究員

昭和63年 4月 日本学術振興会特別研究員

平成元年 4月 筑波大学物理学系助手

平成 5年 4月 筑波大学物理学系講師

平成 6年 4月 北海道大学理学部助教授

平成 7年 4月 北海道大学大学院理学研究科助教授 平成18年 4月 北海道大学大学院理学研究院助教授

平成19年 4月 北海道大学大学院理学研究院准教授

平成26年 1月 北海道大学大学院理学研究院教授

理学研究院教授

あきひと 洞 彰人 氏



定年を迎えるにあたっての感想を申し述べます。生まれ た地、学んだ地、複数の職場といろんな場所を経て、13年 前に縁あって北海道大学にやってきました。それ以前に数 回、北海道を訪れたことはありましたが、ずっと西日本で 生活をしていたわたしにとって、実際に住んでみると多く の発見と驚きがありました。やはり一番の異文化体験は、 冬の光景、つまり雪です。「蛍の光、窓の雪」というのは ある種のたとえだと思っていましたが、月明かりに照らさ れた窓の雪は、実際に書物を読むのに十分で驚きました。 雪の降り始めに、いちょうの葉が氷づけになって、とても きれいだったのもよく覚えています。また、冬のモノトー ンの風景は、わたしどもがやっている抽象数学の世界と相 通じるものがあり、雪に閉じ込められるのも妙に落ち着く ものだなと感じました。

北海道大学は、個性が輝くすばらしい学府だと思いま す。学生の質の高さも感心します。わたしがこれまで在籍 した中で、もっとも教育がやりやすかった大学です。これ からも、徒にボリュームを追い求めることなく、旧帝大と かつまらない価値観に囚われることなく、オンリーワンの 独自の進化を遂げてもらいたいと願っております。

略歴

平成元年 5月 理学博士(京都大学)

平成24年10月 北海道大学大学院理学研究院教授

理学研究院教授

1763 1 松本 丰司 氏



北海道大学に赴任してからの数年間は、研究のための豊 富な時間や経費があり、とても充実した日々を送ることが できました。当時はそれが当たり前だと思っていました が、数年後に独立行政法人となり、運営費交付金が毎年削 減されていき、現状のスタッフ数や予算状況となった今で は、その環境がとても貴重であったと身に染みて感じてい ます。

赴任した当時と現在で大きく変化していることの中で、 私はAI技術の急成長に特に注目しています。将棋や囲碁 の世界では、完全に人間の能力を超えてしまっています。 そういう状況下でも、将棋や囲碁の人気は衰えることはな く、プロ棋士への道はとても険しいものになっています。 大学の研究・教育においても、AIの能力が人間を超えて しまう日が訪れるかもしれません。そうなった場合でも、 AIをうまく活用し、大学の研究・教育が充実したものに なるように準備をしておく必要性を感じています。

今後、少子化が進行しても、北海道大学が若者の活気で 満ちあふれた研究・教育の場であり続けることを願ってい ます。

略歴

生 年 月 日 昭和37年3月

昭和59年 3月 千葉大学理学部卒業

昭和59年 4月 昭和60年 1月 民間 (キヤノン株式会社)

昭和63年3月 千葉大学大学院理学研究科修士課程修了

平成 2年 4月 九州大学理学部助手

平成 4年10月 博士(理学) (九州大学)

平成 6年 6月 九州大学大学院数理学研究科助教授

平成 6年10月 広島大学理学部助教授

平成11年 8月 北海道大学大学院理学研究科助教授 平成18年 4月 北海道大学大学院理学研究院助教授 平成19年 4月 北海道大学大学院理学研究院准教授 平成20年11月 北海道大学大学院理学研究院教授

薬学研究院教授

正 松田 氏



今やすっかり北大キャンパスの顔となった学部前の銀杏 並木、学生時代から何十年も日々眺め続けてきましたがい まだ飽きることはありません。夜半の雨にぬれて金色に輝 く秋の銀杏並木に、雪晴れの青空の下、枝に雪をのせた冬 の銀杏並木と、時折、息を呑む瞬間を与えてくれます。本 業のサイエンスも何十年も続けてきましたが、いまだ飽き ることはありません。

私の恩師の岸本忠三先生が若い研究者への言葉として 「継続が創造を生む"それが生きた証しを残す"」(岸本 記念医学史料館)と書かれていますが、サイエンスは私を 含め個々の研究者がやめていこうとも続いていき、その継 続のもとに成り立ち、さらに後進の研究者を支えます。ま た、研究者はその継続の糸がどんなに細くなろうとも切ら さず、繋ぐ責任を負うものかもしれません。定年となると 少しはその責任も軽くなるのではと思っております。長期 の研究の継続にはその責任をストレスから研究者冥利へと 変えられる力と仲間が必要かもしれません。

早石 修先生の「私の履歴書」の最後の下りに、論文発 表でライバルに負けた学生とご自身に向けて「Today is the first day of the reset of your life – 人生はこれからだ。 今日からまたがんばればいい-」と板書されたとありまし た。北大の若い研究者の方々が長く研究を継続でき、研究 を存分に楽しめるように祈念しております。

略歴

昭和58年 3月 北海道大学薬学部卒業

昭和60年 3月 北海道大学大学院薬学研究科薬学専攻修士課程修了

平成元年 4月 日本学術振興会特別研究員平成 2年 3月

平成 2年 3月 大阪大学大学院医学研究科博士課程修了

医学博士 (大阪大学)

平成 2年 4月 大阪大学医学部バイオメディカル教育研究センター助手

平成10年 2月 富山医科薬科大学医学部助手

平成13年 1月 富山医科薬科大学医学部助教授 北海道大学大学院薬学研究科教授 平成13年12月

平成18年 4月 北海道大学大学院薬学研究院教授

農学研究院教授

京 井上 氏



昭和53年の春に北海道大学へ入学して以来、3年間を除 く45カ年を北海道大学にお世話になりました。学生時代、 馬にまみれた馬術部生活で心身ともに鍛えられ社会を学ば せてもらいました。卒業論文で北海道らしいことをやりた いと泥炭地をテーマに選びましたが、文字どおりそのまま ずぶずぶと泥沼にはまってしまいました。中学卒業時に 「少年老い易く学なり難し」としたためられた色紙をもら ったことを覚えていますが、その格言どおりの結末です。

一方で泥炭地に取り組んだからこそ、特にインドネシア での泥炭地調査を緒として、学内外の多くの皆様との交流 ができ、PAREやOGGs、国際食資源学院、技術支援本部 などにも関わらせていただくことができました。ともに活 動してくださった本学教職員と学生の皆様には心からお礼 を申し上げます。人の世の縁の不思議さを感じます。「馬 には乗ってみよ、人には添うてみよ」の言葉どおり、様々 な機会を提供し、経験と学びを授けてくれた北海道大学に は感謝しかありません。これからもますます多くの人達を 結びつける場となることを心から期待しております。

略歴

生 年 月 日 昭和35年2月9日

昭和58年 3月 北海道大学農学部農業工学科卒業

昭和60年 3月 北海道大学大学院農学研究科農業工学専攻修士課程修了

昭和60年 4月 農林水産省構造改善局計画部事業計画課

昭和60年10月 関東農政局土地改良技術事務所技術情報課

農業土木試験場水工部併任

昭和61年 4月 九州農政局大淀川農業水利事業所工事第一課

北海道大学農学部助手 昭和63年 4月

平成 8年 3月 博士(農学)(北海道大学)

平成 8年 9月 北海道大学農学部講師

平成10年 4月 北海道大学農学部助教授

平成11年 4月 北海道大学大学院農学研究科助教授

平成18年 4月 北海道大学大学院農学研究院助教授

北海道大学大学院農学研究院准教授 平成19年 4月

平成25年 1月 北海道大学大学院農学研究院教授

平成28年 4月7 北海道大学国際連携研究教育局

令和 2年 3月 □

平成29年 4月

北海道大学大学院国際食資源学院長 令和 3年 3月 □

令和 4年 4月 令和 7年 3月 北海道大学技術支援本部副本部長

教育学研究院教授

栄三 氏 大野



大学院生のとき、初めて参加した学会研究大会の開催校 が北海道大学でした。関西から列車と青函連絡船に乗り、 未明に北の大地を踏んで列車へと乗り継ぎ札幌に到着しま した。大通公園を散策し、植物園でリスに出会い、様々な 木々が植樹された広い大学キャンパスに驚きました。当時 は物理学の研究者を志していましたから、十数年後にこの 大学の教育学部で働くことになるとは思いもしませんで した。

本学では、教育方法学(教授学)分野で自然科学教育を 中心に研究を行ってきました。企業の研究所からの転職 で、勝手が分からないまま始まった教育研究でしたが、学 内外の多くの方々に支えていただきました。今でも感謝の 気持ちでいっぱいです。学生と一緒に中学校や高校で研究 授業を行ったこと、理科教師のサークル活動に参加して道 内各地を巡検したこと、自治体委員などの仕事を通して社 会貢献したことなど、学校現場や教育行政とどのように関 わっていくのかを考えながら、私自身の研究を展開してき た30年間でした。やり残したことは幾つもありますが、自 分なりに総括して前へ進もうと思います。お世話になりま した。本学と皆様のますますの発展を祈念しております。

略歴

昭和57年 3月 関西学院大学理学部卒業

昭和59年 3月 関西学院大学大学院理学研究博士課程前期課程修了

昭和62年 3月 関西学院大学大学院理学研究博士課程単位修得退学

昭和62年 4月 平成 7年 3月 民間 (シャープ株式会社)

平成元年 7月 博士 (理学) (関西学院大学)

平成 7年 4月 北海道大学教育学部助教授

平成12年 4月 北海道大学大学院教育学研究科助教授

平成19年 4月 北海道大学大学院教育学研究院准教授

平成21年 4月 北海道大学大学院教育学研究院教授

教育学研究院教授

康子 氏

松田



長い年月を北海道大学で過ごさせていただきました。

振り返れば、教育を受ける立場においても、職業生活を 送るにおいても、研究においても、似たような経験を重ね てきました。あっちに行ってははみ出し、こっちに来てみ てもはみ出し、やがては重なりを認め合いながら、少しは み出しているぐらいを歓迎されたり。

今までずっと、そんな過ごしかたをしてきたように思い ます。

そのような私が教育を受け、勤め続け、教育・研究に携 わりながら、北海道大学に長く居ることを許されてきた年 月は、本当に幸せな時間だったと、今、感じています。ど うやって時代の先端を走り、競争に勝つかということでは なく、ケア実践や研究の場で出会う方々、学生の皆様にど う応答していけば良いのか、一生懸命考えているときが一 番幸せだったように思います。苦しくもあり楽しくもあり ました。

一旦退職をして、あと残り2年間を特任教員として過ご すことになりましたのも、私らしいはみ出し人生の締めく くりのように感じております。

ここまで私を生かしてくださった方々に、心から感謝の 気持ちをお伝え申し上げます。

略歴

昭和59年3月中央大学文学部卒業

昭和62年 3月 北海道大学医療技術短期大学部看護学科卒業

昭和63年 5月 平成 6年12月 民間(医療法人中江病院)

平成 9年 3月 北海道大学大学院教育学研究科修士課程修了

平成10年 3月 北海道大学大学院教育学研究科博士後期課程中退

平成10年 4月 北海道大学教育学部助手

平成15年 3月 博士(教育学)(北海道大学)

北海道大学大学院教育学研究科助教授 平成18年12月

平成19年 4月 北海道大学大学院教育学研究院准教授

平成28年 4月 北海道大学大学院教育学研究院教授

教育学研究院教授

守屋 淳氏



本年3月をもちまして定年退職となりました、教育学研 究院の守屋 淳と申します。前任の兵庫県立大学から、50 歳を超えて北海道に移住することは大きな決断を要しまし たが、この四季の移り変わりを実感できる自然豊かな土地 で過ごせたことは、自分の人生にとって大いに意味あるこ とだったとあらためて思います。

私は教育研究者として主に学校の授業をそのフィールド としてきました。毎年40日程度は小、中、高校に赴き、そ の授業における子どもたちの学ぶ様子や先生方のあり方を 見させていただき、そこから学んだことをもとに、教育と いう複雑でなおかつ豊かな世界について語ったり文章にし たりしてきました。本学に赴任して13年半、「研究大学」と しての北海道大学で「研究成果」として誇れるものを何も残 せなかったのは自分の非力を恥じるばかりですが、特に道 内各地の小、中、高校の先生方から一定の信頼を寄せてい ただけたのは、教育研究者として誇っていいことのように も思います。4月より大学の所属は離れますが、引き続き 教育現場に対して少しでも力になれるよう尽力していきた いと思っています。

本学でお世話になった皆様方、どうもありがとうござい ました。

略歴

生 年 月 日 昭和34年4月23日

昭和57年 3月 東京大学教育学部卒業

昭和59年 3月 東京大学大学院教育学研究科学校教育学専攻修士課程修了

平成元年 3月 東京大学大学院教育学研究科学校教育学専攻博士課程単位修得退学

平成 2年 4月 姬路工業大学講師

平成 6年 4月 姫路工業大学助教授

平成16年 4月 兵庫県立大学助教授

平成22年 4月 兵庫県立大学教授

平成23年10月 北海道大学大学院教育学研究院教授

メディア・コミュニケーション研究院 教授

にしかわ 克之 氏 西川



幸いにも母校の北大に採用されたのが32年前のこと、当 時はまだ解体直前の教養部があり、規模の大きな教官会議 の雰囲気に圧倒されました。その後は大きなものを拾うだ けでも、全学教育体制への移行、国際広報メディア研究科 設置、言語文化部の廃止とメディア・コミュニケーション 研究院、国際広報メディア・観光学院及び外国語教育セン ターの設置、そして学院の一専攻化と、様々な組織改組の 波に洗われてきました。こうした所属する組織の展開に合 わせるようにして、専門とする領域も英文学研究、英国文 化研究、公共伝達論、そして観光研究と変化してきまし た。北大での教員生活開始から遡ること7年前の当時、初 任地の高知大学人文学部では「哲・史・文」という伝統的 な教育研究体制が維持され、時間の流れ方もゆったりとし ていたのを思うと、やはり隔世の感を禁じえません。

私の教員生活において最も劇的な変化は、専門教育に携 わることのなかった言語文化部から研究院・学院体制に移 行して、「自前の学生」を教えることになったことだと言 えます。以来、複数の草鞋を臨機に履き替えながら教育研 究に携わってきましたが、こうしてつつがなく退職の日を 迎えることができたのは、よき同僚教職員の皆さん、そし て辛抱強く話に付き合ってくれた学生の皆さんがあればこ そと感謝しております。

略歴

生 年 月 日 昭和34年4月24日

昭和57年 3月 北海道大学文学部卒業

昭和61年 3月 北海道大学大学院文学研究科修士課程修了

文学修士 (北海道大学) 昭和61年 3月

昭和61年 4月 高知大学人文学部助手

昭和63年 4月 高知大学人文学部講師

平成 5年 4月 北海道大学言語文化部講師

平成 7年12月 北海道大学言語文化部助教授

平成19年 4月 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授

平成22年 4月 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院教授

平成29年 4月 - 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院副研究院長

平成31年 3月

平成29年 4月 北海道大学外国語教育センター長

平成31年 3月]

保健科学研究院教授

千恵次 氏 加藤



私は昭和56年に北大医学部医学科に入学し昭和62年に卒 業しました。北大に来る前は、名古屋大学工学部原子核工 学科で放射線工学や電子工学、情報工学を勉強していまし た。工学が嫌で医学部に転向したわけでなく、名古屋で3 年間、予備校講師バイトを続けたら受験技術が向上し、名 大3年の時に、別天地の北大でも受けてみるかと試したら 合格し、医学への道に進路変更しましたが、工学への未練 が私の研究人生に大きく影響しました。

学生時代及び医師になってもコンピュータを自作しプロ グラム研究をしたり、心電計を作ったり、放射線の国家資 格を取得したりしていましたので、平成18年から保健学科 教員を兼任し、講義でCTの画像再構成原理を教えるプロ グラムを作ったり、心電計を作って医用電子回路を教える 教材を自作したり、趣味がそのまま仕事に活かされ、楽し い教員業務でした。

平成30年に医理工学院の教授を兼任した頃から、パソコ ンでも人工知能を作れる時代が来ましたので、大学院生に は人工知能を使った核医学画像の解析をテーマとした研究 をしてもらいました。大学院生は皆、人工知能プログラム のスキルを身に付けて超一流企業に就職し、教員として非 常に嬉しいことでした。

略歴

牛	玍	Ħ	H	昭和34年11月	9日

昭和62年 3月 北海道大学医学部医学科卒業

昭和62年 4月 北海道大学医学部附属病院放射線科研修医

平成元年 4月 北海道大学医学部核医学講座医員

平成 7年 3月 博士(医学)(北海道大学)

平成 9年 4月 北海道大学医学部核医学講座助手

平成 9年 8月 フィンランド国立トゥルク大学PETセンター研究員

平成11年 4月 北海道大学医学部トレーサ解析学講座客員教員

平成16年 4月 北海道大学医学部保健学科助教授

平成20年 4月 北海道大学大学院保健科学研究院准教授

平成24年 4月 北海道大学大学院保健科学研究院教授

保健科学研究院教授 結城 美智子 氏



この度、令和7年3月31日をもって定年退職を迎えるにあ たり、一言ご挨拶申し上げます。本学に着任してからの約 10年間、大学人としての使命である教育、研究そして社会 活動に貢献すべく過ごしてまいりました。この節目を迎え る今、振り返りますと、多くの素晴らしい経験と出会いに 恵まれました。これまで支えてくださったすべての皆様 に、心より感謝の意を表します。

教育では、看護学教育における「人を支える力」の本質 を改めて考え、学生とともに創造的な解決に至る基礎を育 みました。人生100年の時代を見据え、人々の健康と生活 において社会の看護学への期待がますます大きくなってい ることを痛感しています。

研究においては、がん治療に伴う在宅患者の人的環境へ の抗がん薬曝露予防に関する研究、脳卒中患者の病的疲労 に関する研究、高齢者の介護予防(サルコペニア、フレイ ル) 支援に資する多くのプロジェクトに取り組みました。 すべての過程で関係機関、患者・地域住民の皆様、そして 研究室の学生・スタッフとともに成果を挙げることができ たことを大変誇りに思っております。これらは、研究チー ムの力、そして学内外の多くの方々との協力があって実現 したものであり、深く感謝申し上げます。

最後になりますが、北海道大学の益々のご発展を心より お祈り申し上げます。

略歴

昭和56年 3月	東北大学医療技術短期大学部看護学科卒業
----------	---------------------

平成 5年 3月 聖路加看護大学看護学部卒業

平成 7年 3月 聖路加看護大学大学院看護学研究科修士課程修了 修士(看護学)

平成 7年 4月 聖路加看護学大学看護学部助手

平成 9年 4月 宮城大学看護学部講師

平成12年 3月 東北大学大学院医学系研究科博士後期課程修了 博士 (障害科学)

平成12年10月 宮城大学看護学部助教授

厚生労働省医政局看護課在宅看護専門官 平成16年 4月 平成17年 4月 福島県立医科大学大学院看護学研究科教授

平成27年 1月 北海道大学大学院保健科学研究院教授

岩井 一彦氏

北大へは平成24年に赴任しました。事務の方はとても親 切で、装置や図書の移管手続きなどで大変お世話になりま した。その後は、日々の生活を通じて、北の大地に存在す る大学であることを感じてきました。例えば、冬に学生が 教室の窓際に縦一列に着席していたことです。窓側にヒー ターが設置されていたことが理由でした。夏に扇風機を購 入しようとしたら、居室用は購入できませんと言われたこ とも驚きでした(今は購入できるようです)。

札幌は有名な観光地ですが、学会用の会議室が北大で予 約できず、別施設開催となったことが複数回あり、学会開 催でも人気の地であることも実感しました。

学生気質ですが、留年してでも部活を優先させる学生が いるなど、自分の好きなことに取り組む学生が多い印象で す。これは、運動会、綱引き、名古屋では認められていな い部活の対戦による休講届など、古き良き伝統が今日まで 引き継がれていることと関係がありそうです。教育・研究 ですが、北大での教員一人当たりの学生数は少なく、研究 指導しやすい環境でした。

最後になりましたが、皆様方には大変お世話になりまし た。北海道大学の益々のご発展と先生方のご活躍を祈念い たします。

略歴

昭和61年 3月 名古屋大学大学院工学研究科博士課程前期課程 金属工学および鉄鋼工学専攻修了

平成元年 3月 民間 (愛知製鋼株式会社研究開発部)

平成 5年 3月 名古屋大学大学院工学研究科博士課程後期課程

金属工学および鉄鋼工学専攻修了

平成 5年 3月 博士(工学)(名古屋大学)

平成 5年 4月 名古屋大学工学部助手

平成 8年 4月 名古屋大学工学部講師

平成 9年 4月 名古屋大学大学院工学研究科講師

平成12年 4月 名古屋大学大学院工学研究科助教授

平成19年 4月 名古屋大学大学院工学研究科准教授

平成24年 7月 北海道大学大学院工学研究院教授

工学研究院教授

おおくす 大熊 毅 氏



平成16年に教授として工学研究科(当時)に赴任して以 来、一貫して触媒的有機合成反応の開発研究を行ってこら れたのは、研究室のスタッフや学生、共同研究者をはじめ とする関係者皆様のお蔭です。篤く御礼申し上げます。

在任期間中で強く印象に残っていることの一つに、有機 合成化学分野の大先達である鈴木 章名誉教授(北海道大 学ユニバーシティプロフェッサー)が平成22年にノーベル 化学賞を受賞されたことがあります。本学にとって大変名 誉なことでありましたが、さらに、私はこのご受賞を契機 に文部科学省特別経費「次世代型クロスカップリング反応 が拓く分子構築イノベーション」(平成24年度~平成27年 度) のプログラム代表者となり、化学教育・研究を組織的 に推進する得難い経験をさせていただきました。また、次 世代リーダーの育成と国際連携推進を目指したフロンティ ア化学教育研究センター(FCC)を工学研究院に設置し、 平成25年から現在までセンター長として活動する機会を得 ました。多くの方々のご協力により、FCCに核磁気共鳴装 置6台を新規に設置し、研究に不可欠な測定機器を学内外 で共用するシステムを構築できたことも喜ばしい成果とな りました。

あと2年間、特任教授として勤めますが、悔いの残らぬ よう精進したいと思います。

略歴

生 年 月 日 昭和37年2月5日

昭和60年 3月 慶應義塾大学理工学部卒業

昭和62年 3月 慶應義塾大学大学院理工学研究科修士課程修了

平成 3年 1月 名古屋大学大学院理学研究科博士課程後期課程修了

平成 3年 1月 理学博士(名古屋大学)

平成 3年 3月 アメリカ合衆国スタンフォード大学博士研究員

平成 4年 3月 新技術事業団研究員

平成 8年10月 名古屋大学大学院理学研究科助教授

平成16年6月 北海道大学大学院工学研究科教授 平成22年 4月 北海道大学大学院工学研究院教授

おおしま のぶゆき 大島 伸行氏



平成17年の着任からちょうど20年を北海道大学にて勤務 させていただきました。特任再雇用にてもうしばらくお世 話になりますが、この節目に皆様へ定年のご挨拶ととも に、長年のご厚誼に感謝お礼を申し上げます。

略歴

生 年 月 日 昭和36年5月26日 昭和59年 3月 東京大学工学部卒業 昭和61年 3月 東京大学大学院工学系研究科舶用機械工学専攻修士課程修了 平成元年 3月 東京大学大学院工学系研究科舶用機械工学専攻博士課程修了 平成元年 3月 工学博士(東京大学) 平成元年 4月 東京大学生産技術研究所講師 平成 3年 4月 東京大学生産技術研究所助教授 平成12年 4月 東京大学情報基盤センター助教授 平成17年 1月 東京大学生産技術研究所助教授 平成17年 2月 東京大学生産技術研究所教授 平成17年 4月 北海道大学大学院工学研究科教授 平成22年 4月 北海道大学大学院工学研究院教授

工学研究院教授

おざわ 小澤 丈夫 氏



平成17年4月、それまでご縁のなかった北海道に着任す ることになりました。新千歳空港への着陸前、北海道の風 景を空から眺めて感じた印象を今でもよく覚えています。

農業・土木・建築をはじめとする技術によって創り上げ られた雄大な景観。それは、1990年代に長く暮らし、建築 家として大いに勇気づけられたオランダの風景を髣髴とさ せてくれるものでした。私は大きな期待を抱き北海道の地 に降り立ちました。

それまでの仕事のキャリア前半20年間は、建築設計・都 市空間デザインの実務に没頭する日々でした。東京、スイ ス、オランダ、神戸、宮崎など様々な土地を拠点とした 後、北大で身を置くことになったのは、60年近い歴史をも つ建築史意匠学研究室でした。身近には、都市地域デザイ ンを専門とする研究室などもあり理想的な研究環境が整っ ていました。私の仕事のキャリア後半20年間は、このよう な環境に支えられたものでした。

道内各地の形成過程を読み取ることと並行し、スイス、 オランダ、オーストリア、イタリアなど欧州各国を中心 に、その都市空間や建築デザインの方法・評価・教育のし くみなどについて探り続けました。同時に、北大キャンパ スや市町村にたつ建築の実施プロジェクトに携わる機会を 頂くこともできました。研究と実務への取り組みを、でき るだけ学生と共有することで、将来の人材を育てられるの ではないかと考え行動してきましたが、それがどこまでで きたのかはわかりません。今後、彼/彼女たちが活躍して いく姿を楽しみに見ていきたいと思っています。

末筆になりますが、これまでにお世話になった多くの皆 様に深く感謝の意を表したいと思います。ありがとうござ いました。

略歴 生 年 月 日 昭和36年6月 昭和59年 3月 東京工業大学工学部卒業 昭和60年 9月 ¬スイス連邦工科大学チューリッヒ校 (ETHZ) 建築学部 昭和61年 7月 昭和62年 3月 東京工業大学大学院理工学研究科修士課程修了 昭和62年 4月 平成 5年 9月 民間 (株式会社大林組) 平成 6年 5月 - 民間 (ヘルマン・ヘルツベルハー建築設計事務所) 平成10年 8月 平成 8年 4月 ベルラーヘ・インスティテュート・アムステルダム修士課程修了 平成 8年 8月 了自営 (テォ・アーキテクツ建築設計事務所、管理建築士) 平成17年 3月 平成16年12月 博士(工学) (北海道大学) 平成17年 4月 北海道大学大学院工学研究科助教授 北海道大学大学院工学研究科准教授 平成19年 4月 平成22年 4月 北海道大学大学院工学研究院准教授 平成28年 9月 北海道大学大学院工学研究院教授 平成31年 4月 计准海道大学総合博物館館長 令和 5年 3月 平成29年 4月] 北海道大学総長補佐令和 7年 3月

キさス 菊地 優 氏



北大病院で生を享け、幼少の頃から北大キャンパスが遊 び場であったこともあり、なんら他の選択肢を考えずに北 大へ進学しました。大学院修了後は東京の建設会社に入社 し、建築物の耐震性能を飛躍的に向上させる免震構造とい う建築構法に出会い、それが生涯の研究テーマとなりまし た。会社在職中には米国カリフォルニア大学バークレー校 に派遣され、免震構造の世界的権威であるJames M. Kelly 教授のもとで学ばせていただきました。帰国後は建築家 ル・コルビュジエの作品として世界遺産に登録された国立 西洋美術館の免震改修プロジェクトに参画するなど、担当 業務にも恵まれ多くの研鑽を積むことができました。

16年間の会社勤務を経て平成14年に北大へ戻り工学研究 科助教授として着任しました。平成21年に教授に昇任して からは小さな工務店を経営するという感覚で研究室を運営 し、教員・研究活動に加え、研究費の獲得や博士課程学生 の輩出に奔走しました。気がつけば今年で定年を迎えると いう転瞬の23年間でした。自由な環境で教育・研究活動を 行う機会を与えていただいたことには、ひとえに感謝の念 に堪えません。北大の益々の発展を祈念しております。

略歴

生 年 月 日 昭和37年1月10日

北海道大学工学部卒業 昭和59年 3月

昭和61年 3月 北海道大学大学院工学研究科建築工学専攻修士課程修了

昭和61年 4月 平成14年 3月 民間 (清水建設株式会社)

平成 7年 9月 博士(工学)(北海道大学)

平成14年 4月 北海道大学大学院工学研究科助教授 平成19年 4月 北海道大学大学院工学研究科准教授

北海道大学大学院工学研究科教授 平成21年 4月 平成22年 4月 北海道大学大学院工学研究院教授

工学研究院教授

2.1° t-おさむ 藤田 修 氏



昭和62年に北海道大学工学部に着任して以来38年の時を 本学で過ごしました。学部・大学院時代の9年間も北大で 過ごしており、人生の3分の2以上を北大で過ごしたことに なります。北海道の田舎で生まれ育った自分にとって北大 はまさに憧れの場所でした。そのような場所で教員として 学生を指導する立場となり、自分が少年の時に抱いた北大 のイメージに相応しい研究と学生の育成ができているのだ ろうかと自問する日々が続くまま定年になってしまったと いうのが実感です。

今更ながらではありますが、学生が成長するにはそれぞ れが人生の目標や意味を見出し、それを達成するために自 身が主体的に学びたいと願うようになることが最も重要で あると、改めて思う次第です。それに対し、教員としてで きることは、そのような気持ちになってもらえるような環 境を作り学生と対話することだと思いますが、翻って自分 はそれが十分にできていたのか少しの心残りを感じてい ます。

近年、北大では学生の海外派遣や社会との共創体験を通 して主体的な学びへの意識を高める全学横断プログラムな ども提供されはじめていますが、このような環境も活かし つつ学生が主体性を持って学び、北大の卒業生が各方面で 活躍し続けることを心より願っています。末筆になります が、これまでの皆様のご支援ご厚情に心より感謝を申し上 げます。

略歴

生 年 月 日 昭和34年7月19日

昭和57年 3月 北海道大学工学部卒業

昭和59年 3月 北海道大学大学院工学研究科機械工学専攻修士課程修了

昭和62年 3月 北海道大学大学院工学研究科機械工学専攻博士後期課程修了

昭和62年 3月 工学博士(北海道大学)

昭和62年 4月 北海道大学工学部講師

平成 2年 4月 北海道大学工学部助教授

平成 9年 4月 北海道大学大学院工学研究科助教授

平成15年 4月 北海道大学大学院工学研究科教授

平成22年 4月 北海道大学大学院工学研究院教授

矢久保 考介 氏



学生時代を含めると46年もの長きにわたって北大に通い 続けたことになります。同じ場所に人生の70%以上も在籍 していたにもかかわらず、今でも刺激に富んだ毎日が過ご せているのは、決して飽きさせることのない美しいキャン パスに囲まれ、活気溢れる若い学生と真剣に意見交換がで きる環境にいるおかげだと確信しています。

「昔に比べると最近の学生は・・・」という意見をよく 耳にしますが、自身の将来のことを真剣に考え、少し背伸 びをしてでも成長しようとする姿勢は、今も昔も変わらな いように私は感じます。私の研究人生は、そうした学生と 毎日触れ合うことができ、彼らとのディスカッションによ って支えられてきたと言っても過言ではありません。学生 からのアイデアに期待するということではなく、うまく整 理されていない私自身の考えを只々聞いてもらうだけで、 問題点が整理されたことがどれほど多かったか数え切れま せん。とは言え、研究がいつも順調に進むわけではないの は勿論です。そんな時には、北大キャンパスの自然がいつ も私を癒してくれました。この美しいキャンパスと、北大 生の朴訥ではあるけれども真摯な気質が永遠に続くことを 願いつつ退職いたします。長い間、ありがとうございま した。

略歴

生 年 月 日 昭和35年2月18日

昭和59年 3月 北海道大学理学部卒業

北海道大学大学院工学研究科応用物理学専攻修士課程修了 昭和61年 3月

昭和62年 5月 北海道大学大学院工学研究科応用物理学専攻博士後期課程退学

昭和62年 6月 北海道大学工学部助手

博士(工学) (北海道大学) 平成 4年 3月

平成 5年 4月 北海道大学工学部助教授

平成 9年 4月 北海道大学大学院工学研究科助教授

平成19年 4月 北海道大学大学院工学研究科准教授

北海道大学大学院工学研究科教授 平成20年 9月

平成22年 4月 北海道大学大学院工学研究院教授

医学研究院教授 山本 有平 氏



平成17年4月、45歳での主任教授就任以降、皮膚軟部組 織腫瘍の集学的治療、頭頸部・乳房に代表される身体各部 位の再建、顔面神経麻痺の外科的治療、抗加齢医療として の整容・美容外科など、北大形成外科の診療、教育、研究 において、明確なビジョンを掲げ、力強いリーダーシップ を心掛けて、教室運営を執り行ってきました。その間、常 に私の心に留めおいた各界のアスリート達の名言を記し ます。

· Talent wins games, but teamwork and intelligence win championship.

from Michael Jordan

・周りを見て、自分が突き抜けるには、どこの能力をどう プラスにするか?

適正な努力をちゃんとできる頭を持っている人が成功する。 自分の頑張る場所を見極める事が大事。

正しい場所で、正しい方向で、正しい時期に、十分な量を なされた努力は裏切らない。

ネガティブな言葉は、言われた人間には鎖の様に絡み付く。 from ダルビッシュ有

後輩を叱る時は、

ミスを責め、人格を責めない。他人と比較しない。 長時間責めない。必ず、後でフォローする。

from 平尾誠二

北海道大学教授の立場により、いまだ発展途上である形 成外科領域において、道内を中心とした地域医療の質の向 上に寄与し得たこと、多くの専門医、医学博士、そして医 育機関の長たる大学主任教授を育てあげ輩出できたことに 感謝申し上げます。これからの北海道大学の益々の発展を 心より祈念しております。

略歴

昭和59年 3月 北海道大学医学部卒業

平成17年 4月 北海道大学教授(医学研究科·医学部形成外科学分野)

平成19年8月 フダン大学・中山医院(上海・中国)客員教授

平成20年 1月 アラバマ州立大学 (バーミングハム・米国) 客員教授

平成29年 4月 北海道大学大学院医学研究院教授

歯学研究院教授

やすざき 山崎 氏



昭和54年4月に北海道大学に入学以来、46年間の長きに わたり北海道大学で過ごしてまいりました。実家は北海道 大学のすぐ近くにありましたので、小学生の頃からよく構 内で遊んでいました。

私は変わった経歴の持ち主で、北大卒業後は当時の第一 口腔外科(現在の口腔診断内科)に入局し、口腔外科の臨 床・研究に精進してまいりました。その後、専門が口腔内 科になり、さらに、縁あって平成25年8月に高齢者歯科学 教室の教授を拝命いたしました。就任時にはよく皆様か ら、これからは高齢者歯科の時代だねと言われたものでし たが、それから早12年が経過しました。日本の高齢化の荒 波のなかで、安心安全な歯科治療を提供できる人材育成の ために学生・研修医・医局員の教育の充実に尽力してまい りました。また従来から不定愁訴とされ、どの医療機関か らも相手にされてこなかった歯科心身症の患者さんに向き 合い、一助となる努力を続けてまいりました。今後はこの 経験を地域医療に活かす所存です。今年は来年の北海道大 学創基150周年へのまさにカウントダウンの年になろうか と思います。これまで永きにわたり支えていただいた多く の皆様に深く感謝申し上げるとともに、北海道大学の今後 の益々の発展を心から祈念いたしております。

略 歴

生 年 月 日 昭和34年11月8日

昭和60年 3月 北海道大学歯学部卒業

平成 5年 8月 北海道大学歯学部附属病院助手

平成 8年 9月 博士(歯学)(北海道大学)

北海道大学歯学部助手 平成11年 7月

平成12年 4月 北海道大学大学院歯学研究科助手

北海道大学病院助手 平成18年 5月

北海道大学病院講師 平成18年 6月

平成25年 8月 北海道大学大学院歯学研究科教授

平成29年 4月 北海道大学大学院歯学研究院教授

獣医学研究院教授

いたたみ おさか 稲波 修 氏



昭和53年に入学してから、大学院修了後に他機関ですご した9年余りを除き実質35年ほど北海道大学にお世話にな りました。大学院でのテーマであった放射線によるDNA 損傷に至るラジカルの検出に興味をもち、その後の私の進 路が方向づけられました。本学に29年前に赴任してから放 射線誘導細胞死の機構やそれに関わる細胞内小器官の放射 線応答などについて心置きなく研究分野を広げることがで きました。獣医学部では学部紀要のJapanese Journal of Veterinary Researchの編集長を長きにわたり担当させて いただき、この間に第三者査読と電子公開のシステムを構 築することができ、IFを持つ国際学術英文誌としての発展 に少しでも寄与できたことを嬉しく思っております。

また、10年にわたり放射性同位元素の全学委員会の委員 長の大役も担わせていただきました。その期間、大過なく 終えることが出来ましたのは、委員会メンバーや安全衛生 本部のスタッフのご援助の賜物だと感謝しております。 最後になりますが、私を育ててくれた北海道大学、お世話 になりました教職員の皆様、研究室のスタッフ及び学生に 感謝いたします。

略歴

生 年 月 日 昭和34年7月6日

昭和57年 3月 北海道大学獣医学部獣医学科卒業

昭和59年 3月 北海道大学大学院獣医学研究科形態機能学専攻修士課程修了

獣医学博士 (北海道大学) 昭和62年 3月

昭和62年 4月 東京老人総合研究所生理老化学研究系主事平成 4年12月

平成 5年 1月 岩手大学農学部助手

平成 6年12月 岩手大学農学部助教授

平成 8年 9月 北海道大学大学院獣医学研究科助教授

平成19年 4月 北海道大学大学院獣医学研究科准教授

平成19年 5月 北海道大学大学院獣医学研究科教授

平成29年 4月 北海道大学大学院獣医学研究院教授

獣医学研究院教授

かつみ 稲葉 睦 氏



顧みれば、夢中で実験台に向かい苦手な講義や教育の世 界通用性に頭を悩ませながら、学生時代を含めて40年近く を北海道大学で過ごしました。研究も教育も未だにヒヨッ コのままですが、悩ましくも楽しい研究を続け、多くの学 生の知的訓練や大学の運営に多少なりとも携わって過ごせ たのは、寛容な教員・職員の皆さん、ユニークかつ優れた 先達・同輩の皆さん、闊達な学生諸氏とのまさに邂逅あっ てのことと改めて感じております。ありがとうございま した。

とりわけ科学研究者として大切な知的刺激を与えてくだ さった本学他部局の諸先生方、愚鈍怠惰と我が儘を許容し てくださった職員諸兄に心底の感謝を差し上げます。さて 北海道大学には「lofty ambition 高邁なる精神」「紳士た れ」という言葉が残されております。果たして高邁なる精 神に恥じぬ大学人であり得たかヒヨッコとして甚だ疑問で すが、公平・公正であることだけは貫けたと思います。自 由闊達な学問の場である大学が存亡の危機にあり内外社会 が妙な変貌に向かう今、高邁かつ公平・公正の精神こそを 大学人は念わねばならぬでしょう。皆さんのご健勝をお祈 りいたします。これから人生の放課後、私もまだまだ学び を続けていこうと思っております。

略 歴

生 年 月 日 昭和35年1月22日 昭和57年 3月 北海道大学獣医学部卒業 昭和59年 3月 北海道大学大学院獣医学研究科予防治療学専攻修士課程修了 昭和60年11月 北海道大学大学院獣医学研究科予防治療学専攻博士課程退学 昭和63年12月 獣医学博士(北海道大学) 昭和60年11月 北海道大学獣医学部助手 昭和63年11月 北海道大学獣医学部講師 平成 2年 4月 平成 3年 3月 マガンユ・メディカルセンター研究員 (米国シカゴ市) 平成 6年 4月 東京大学農学部助教授 平成 8年 4月 東京大学大学院農学生命科学研究科助教授 平成14年 9月 北海道大学大学院獣医学研究科教授 平成20年 4月7 北海道大学大学院獣医学研究科附属動物病院長 平成22年 3月」 平成22年 4月 北海道大学教育研究評議会評議員平成29年 3月 平成25年 4月 平成29年 3月 北海道大学大学院獣医学研究科長・獣医学部長

平成29年 4月 北海道大学大学院獣医学研究院教授

令和 2年11月 令和 6年 3月 北海道大学附属図書館副館長

獣医学研究院教授

苅和 宏明 K.



平成2年4月に獣医学部の助手として採用していただいて から、これまで35年間北海道大学の教員として勤めさせて いただきました。手書きの文書がまだ一般的であった採用 当時から、今ではデジタルで文書が頻繁にネット上でやり 取りされるようになるなど、時代の趨勢を感じます。

北大在職中は、よき恩師、諸先輩、同僚、そして学生に 恵まれたお陰で、専門分野である人獣共通感染症の研究を 継続することができました。国内外の多くの研究者との野 外活動や共同研究も懐かしく思い出されます。また、帯広 畜産大学との共同獣医学課程や欧州獣医学教育機関協会 (EAEVE) による認証取得に関わる活動に携わることが できたのは、大学教育の意味を考える上で、大変良い経験 になったと思います。特にEAEVEによる認証取得過程で は、大学教育の質を客観的に評価する手法、教育の質の保 証、教育改善の自主的実施方法など、教育面で大学が取り 組むべき課題について学ぶことができました。学内行事の 実施や日常業務に関しては、多くの事務職員にもご協力を いただきました。在職中にお世話になりましたすべての皆 様に感謝申し上げお礼の言葉といたします。ありがとうご ざいました。

略歴

生 年 月 日 昭和36年7月9日 昭和59年 3月 北海道大学獣医学部獣医学科 昭和61年 3月 北海道大学大学院獣医学研究科修士課程修了 昭和61年 4月 民間(武田薬品工業株式会社)平成 2年 3月 平成 2年 4月 北海道大学獣医学部助手 平成 7年 4月 北海道大学獣医学研究科助手 平成 7年 6月 博士(獣医学) (北海道大学) 平成 8年 4月 北海道大学大学院獣医学研究科講師 平成11年 4月 北海道大学大学院獣医学研究科助教授 平成19年 4月 北海道大学大学院獣医学研究科准教授 平成25年 7月 北海道大学大学院獣医学研究科教授

平成29年 4月 北海道大学大学院獣医学研究院教授

文学研究院教授

櫻井 義秀 氏



北海道大学では学部・大学院で7年間学び、30歳で専任 講師として他大学から着任して33年間勤務し、計40年間の 幸せな時間を過ごさせていただきました。

少年老い易く学成り難しとはよく云ったものです。単 著・編著で42冊本を書きましたが、興味の赴くままあれも これもと手を出し、一つの分野に専心とはいきませんで した。

平成2年から20年かけたタイ研究は世間に注目されず、 平成22年に出版した統一教会の研究が、令和4年の安倍晋 三元首相銃撃事件以降、注目されるようになりました。

大学の仕事では、社会学の教育(19名の学位論文主査) に加えて、30年間学生相談の一環としてカルトの勧誘に巻 き込まれた学生や保護者の相談にのってきたこと、ハラス メント相談室を立ち上げ8年間室長を務めてきたことなど が、私らしい仕事と言えるかもしれません。

現在の大学を取り巻く環境、日本社会の将来には厳しい 状況が待ち構えていると思います。職員の皆様には、それ でも楽観主義で仕事に精勤していただき、教員の皆様に は、研究・教育を天職としてぶれずに貫き通してほしいと 願っております。

北海道大学のキャンパスは、不敵なカラスがやや興ざめ ですが、気宇壮大な北大人を育む景観とスピリットに満ち ています。そうしたメインストリートを歩く再雇用期間を 2年間与えられていることにも感謝して、北海道大学への 御礼を申し上げます。

略歴

生 年 月 日 昭和36年4月18日

昭和59年 3月 北海道大学文学部哲学科卒業

昭和61年 3月 北海道大学大学院文学研究科修士課程修了

北海道大学大学院文学研究科博士後期課程退学 昭和62年 3月

北星学園女子短期大学(北星学園大学短期大学部)専任講師 昭和62年 4月

平成 4年 4月 北海道大学文学部講師

平成 8年 4月 北海道大学文学部助教授

平成16年 4月 北海道大学大学院文学研究科教授

平成17年12月 博士(文学) (北海道大学)

平成31年 4月 北海道大学大学院文学研究院教授

文学研究院教授 知己 佐藤 氏



特任教授としてまだあと2年、大学には在籍の予定です が、節目にあたり一言お礼申し上げます。昭和55年に入学 して以来、44年の長きにわたりお世話になりました(シー ラカンスです)。途中、4年間は外に出ておりましたが学生 10年、教員30年を過ごしたことになります。

言語学、特に「アイヌ語学」という国内では認知度が低 いマイナーな分野の研究をしていたため、様々な困難があ りましたが、皆様のご理解やご協力を得て、なんとか定年 を迎えることができました。諸先生、事務職員、学生の皆 様に心よりお礼申し上げます。

最後に、ある元留学生からの言葉を皆様にお贈りしま す。病に倒れる前、彼女は私にこう言いました。「静かな 環境のなかで自由に研究し、ジンギスカン鍋をつつき合 い、上下関係を気にせずに思い切り議論し、好きなだけ勉 強に集中できた。北大は最高に良い大学でした。あなたと 北大には感謝している」と。彼女はドイツの一流大学の教 授になっていましたが、御主人からの突然の訃報に愕然と しました。彼女の魂よ安かれ。お参りに行くからね。そし て、願わくは、北大が今後もこの古き良き伝統を保ちつ つ、激動の時代の荒波を果敢に乗り切って行かれんことを。

略歴

生 年 月 日 昭和36年6月3日

昭和59年 3月 北海道大学文学部文学科卒業

昭和62年 3月 北海道大学大学院文学研究科修士課程修了

平成 2年 3月 北海道大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学

平成 2年 4月 北海道大学言語文化部非常勤講師

平成 2年10月 国際日本文化センター研究部助手

平成 3年10月 北海道教育大学教育学部岩見沢分校助手

平成 5年10月 北海道教育大学教育学部岩見沢校助教授

平成 6年10月 北海道大学文学部助教授

平成12年 4月 北海道大学大学院文学研究科助教授

平成19年 4月 北海道大学大学院文学研究科准教授

平成21年 4月 北海道大学大学院文学研究科教授

平成31年 4月 北海道大学大学院文学研究院教授

文学研究院教授

めけず 和順 氏 弛



いまは無き共通一次試験がはじめて実施された昭和54年 春、私は、本学文Ⅰ系に入学しました。以来、文学部、大 学院文学研究科等で9年間学んだ後、一時、本学を離れま したが、平成7年に教員として母校に戻ってからは、今日 まで30年間にわたり、お世話になりました。

顧みれば、寮歌「都ぞ弥生」に謳われた四季折々の美し い自然の中で、研究と教育にかかる日々を過ごすことがで きたのは、この上なき幸福でありました。

この間、専門とする中国古代思想に関する研究に専心す るかたわら、文学部、文学研究科、文学院、さらには全学 教育、新渡戸カレッジにおいて授業等を担当するととも に、あまたの学生、大学院生の研究指導に従事できたこ と、有り難く思います。

本学の諸先生方には、様々な機会に数々のご指導をたま わり、事務職員の皆様には、つねづね献身的なご支援をい ただいたこと、そして学生、院生からは、学びと遊びの中 で幾多の刺戟を受けたことは、生涯忘れることができない でしょう。この場を借りて、心より深謝申し上げます。

本学が、今後も研究、教育のいわば知の拠点として、一 層の発展を遂げるとともに、学内外に「永遠の幸」をもた らさんことを祈念して、退職の言葉とします。

略歴

生 年 月 日 昭和34年8月2日

昭和58年 3月 北海道大学文学部哲学科卒業

昭和60年 3月 北海道大学大学院文学研究科修士課程修了

昭和63年 3月 北海道大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学

昭和63年 4月 名古屋大学文学部助手

平成 7年 4月 北海道大学文学部助教授

平成12年 4月 北海道大学大学院文学研究科助教授

平成17年 9月 北海道大学大学院文学研究科教授

平成20年 4月 平成22年 3月 北海道大学大学院文学研究科副研究科長

平成21年 4月 平成22年 3月 北海道大学評議員

平成22年 4月 平成26年 3月 北海道大学大学院文学研究科長·文学部長

平成27年 4月7

平成29年 3月 北海道大学総長補佐

平成31年 4月 北海道大学大学院文学研究院教授

令和 2年10月 北海道大学副学長

情報科学研究院教授

五十嵐 一 氏



「けふもまた こころの鉦(かね)をうち鳴らし うち鳴 らしつつ あくがれて行く」(若山牧水、読み仮名筆者)。 高校のころに物理や微積分の面白さに目覚め、大学の研究 者にあこがれました。本学大学院修了後に企業に就職しま したが、恩師に誘われ、助手として研究に従事できるよう になりました。それから約35年間、多くの学生、企業の技 術者の方々と電磁界解析や最適設計の研究に従事してきま した。思い描いたような大きな貢献はできませんでした が、国内外の研究機関で教え子達が活躍していますので、 彼ら彼女らに今後を託したいと思います。

北大生だった頃、教養部の英語の授業でホーソーンやマ ンスフィールド等の小説を習ったことがよい思い出として 残っています。これらを通して人生の機微や文学の薫り高 い描写に触れることができました。また街中からキャンパ スに入ると、豊かな自然とアカデミックな雰囲気が醸す独 特の気を感じ、この中でとても豊かな時間を過ごせたと思 います。私自身は実学に従事してきましたが、役立つか否 かということとは異なる、実社会の価値観では測りきれな い研究も大切にしていただきたいと思います。北大が若者 のあこがれであり続けることを祈っています。

略 歴

生 年 月 日 昭和34年11月3日

昭和57年 3月 北海道大学工学部卒業

昭和59年 3月 北海道大学大学院工学研究科修士課程修了

昭和59年 4月 昭和63年12月 民間 (キヤノン株式会社)

昭和64年 1月 北海道大学工学部助手

平成 4年12月 博士 (工学) (北海道大学)

平成 7年 9月 - ベルリン工科大学フンボルト財団研究員 平成 9年10月」

平成 7年11月 北海道大学大学院工学研究科助手

平成11年 4月 香川大学工学部助教授

平成13年 4月 北海道大学大学院工学研究科助教授 平成16年 4月 北海道大学大学院情報科学研究科教授 平成31年 4月 北海道大学大学院情報科学研究院教授

情報科学研究院教授 レみた あきひさ 富田 章久 氏



北海道大学大学院情報科学研究科 (着任当時) の教員と なって15年間、充実した日々を過ごせたことを同僚諸氏と 学生の皆様に感謝いたします。

私が大学に移った平成22年は、第一次量子情報ブームが 過ぎ、いわゆる幻滅期のころでした。大学に移ることによ り、これまで手が出せなかった基礎的な事柄を研究してい くことができました。量子暗号鍵配布装置は平成22年時点 で実用化の域に達していましたが、実機における安全性保 証は進んでいませんでした。これには量子暗号の安全性の 背後にある仮定の吟味と実際の装置との関連付けが必要と なります。安全性保証技術は国際的な標準化を行うまでに 成熟させることができ、北大での研究成果が大きく貢献し ています。また、量子力学の基本的な性質を実験的に調べ たり、光量子コンピュータの構成法を考えたりといった長 期的に役立つ研究成果も得ることができました。

北大に移ったときに先輩の教授から、「研究業績を上げ るより学生を育てよ。学生がやりたいことは学生の少し先 を行けるよう勉強せよ」、といったアドバイスをいただき ました。学生の成長に自分が貢献できたか、それほど自信 はありませんが、少しでも役に立っていたならば幸せなこ とと思います。

情報科学研究院の優れた環境に感謝するとともに、今後 も北大の情報科学が世界をリードしていくことを祈念いた します。

生 年 月 日 昭和34年10月18日

昭和57年 3月 東京大学理学部卒業

昭和59年 3月 東京大学大学院理学系研究科物理学専攻修士課程修了

平成22年 3月 民間(日本電気株式会社)

平成10年 9月 博士 (工学) (東京大学)

平成22年 4月 北海道大学大学院情報科学研究科教授

平成31年 4月 北海道大学大学院情報科学研究院教授

令和 2年 4月 $_{1}$ 北海道大学大学院情報科学研究院副研究院長·情報科学院副学院長 令和 4年 3月

情報科学研究院教授

山下 氏



18歳で北大に入学してから、途中で奈良先端科学技術大 学に勤務していた8年間を除いて、人生のほとんどを北海 道大学とともに歩んできました。諸先生方、同僚の皆様、 そして研究を共にした学生の皆様のご支援やご協力に心よ り感謝するものであります。

学生時代より一貫してシステム制御理論の研究を続けて まいりました。昔からある研究分野ですが、テーマの大き な方針変更なしに研究を続けてこられて幸運な研究生活で した。制御分野で昔から理論と実践の乖離があると言われ ていることに反発し、複雑な対象や制約に対しても適用で きる理論を作ろうとしてきた日々でした。特に非線形制御 理論を専門とするので研究内容が数学寄りになることがあ る程度避けられないのですが、指導した工学系学生諸君が 数学的な課題に対しても取り組んで成果をあげてもらえた のは大変ありがたいことです。また、工学系に在籍しなが ら理論寄りの研究を続け、充実した日々を過ごすことがで きましたのは、北海道大学の自由な気風と周りの皆様のお かげです。

大学や研究環境などをめぐる変革の波が押し寄せてきて おり、今後もさらなる波が押し寄せることと思いますが、 北海道大学の益々の発展を期待しております。ありがとう ございました。

略歴

生 年 月 日 昭和36年7月25日

昭和59年 3月 北海道大学工学部卒業

昭和63年 3月 北海道大学大学院工学研究科博士後期課程退学

昭和63年 4月 北海道大学工学部助手

平成 3年 4月 北海道大学大学院工学研究科助手

平成 5年 3月 博士(工学)(北海道大学)

平成 8年 4月 奈良先端科学技術大学情報科学研究科助教授

平成16年 4月 北海道大学大学院情報科学研究科教授

平成31年 4月 北海道大学大学院情報科学研究院教授

低温科学研究所教授 江淵 直人氏



平成14年より23年間勤めてまいりました北海道大学を退 職することとなりました。これまでにお世話になったすべ ての方々に心から感謝申し上げます。

私は、大気と海洋の境界面の物理過程、人工衛星に搭載 したマイクロ波センサによる海面観測と、そのデータをも とにした大気・海洋相互作用の研究を行ってきました。ま た、北大低温研着任後は、宗谷海峡及び紋別・雄武海域に 短波海洋レーダを設置し、宗谷暖流の観測とその変動メカ ニズムの研究を始めました。土地勘もないまま、技術職 員・事務職員の方々とオホーツク海沿岸を走り回り、数々 のトラブルに見舞われながらも、平成15年から令和4年ま での19年間にわたる貴重な観測データを得ることができま した。低温研の恵まれた環境で研究に没頭できたことに感 謝します。

4月からは、再雇用の特任教員として引き続きお世話に なります。今年度前半には、日本の新しい地球観測衛星 GOSAT-GWの打ち上げが予定されています。この衛星に 搭載されるマイクロ波放射計AMSR3のサイエンスチーム のリーダーを務めています。AMSR3のデータ処理・配布 を文字通り「軌道に乗せる」ことが私の最後の仕事だと考 えています。

略歴

生 年 月 日 昭和36年7月2日

昭和59年 3月 東北大学理学部卒業

昭和61年 3月 東北大学大学院理学研究科博士前期課程修了

昭和62年12月 東北大学大学院理学研究科博士後期課程退学

昭和63年 1月 東北大学理学部助手

平成 4年 2月 東北大学理学部附属大気海洋変動観測センター助手

平成 4年 3月 博士 (理学) (東北大学)

平成 6年 5月 東北大学理学部附属大気海洋変動観測センター助教授

平成10年 4月 東北大学大学院理学研究科附属

大気海洋変動観測研究センター助教授

平成14年 4月 北海道大学低温科学研究所教授

平成17年 4月 平成26年 3月 北海道大学低温科学研究所附属環オホーツク観測研究センター長

平成26年 4月 北海道大学低温科学研究所長平成30年 3月

低温科学研究所附属環オホーツク 観測研究センター教授

史夫 氏



低温科学研究所に赴任以来、22年間お世話になりまし た。あっという間の22年間というのが実感です。着任早々 環オホーツク観測研究センターが開所し、すばらしい教 員・スタッフ・学生に恵まれて充実した研究生活を送るこ とができました。オホーツク海は比較的狭い海ですが、広 大なユーラシア大陸と北太平洋に挟まれ、冬は海氷の生 成、夏はオホーツク高気圧の形成といった、他にはない特 徴的な姿を見せます。さらに栄養分に富んだ海水は、北太 平洋の豊かな水産資源を支えています。私の専門は海洋物 理学ですが、オホーツク海を中心としたこの広大な地域・ 海域を日々探求し、センターのメンバーをはじめとする多 彩な研究分野の優れた研究者と切磋琢磨できたことは、か けがえのない喜びでした。また、研究を進めるにあたり、 ロシアを何度も訪問しました。現在は困難な状況ですが、 彼らとの交流は北海道大学の研究者ならではのことと考え ております。

学生や研究員の皆様との日々の対話も楽しく、また刺激 的でありました。空想は赤道を飛び越え、南半球へ南極還 流へと広がりました。ただ、授業に関しては、学問のこの 楽しさを伝えることができているのだろうか、と自問自答 する日々でもありました。

最後になりますが、低温科学研究所の皆様には大変お世 話になりました。自由闊達な環境のもと研究・教育に没頭 できたのは、ひとえに皆様の支えのおかげです。深く感謝 申し上げます。

略 歴

生 年 月 日 昭和34年12月24日

昭和57年 3月 東北大学理学部卒業

昭和59年 3月 東北大学大学院理学研究科博士前期課程修了

昭和62年 3月 東北大学大学院理学研究科博士後期課程修了

昭和62年 3月 理学博士(東北大学)

昭和62年10月 オーストラリアニューサウオール大学リサーチアソシエイト

平成 2年12月 オーストラリア連邦科学産業研究機構研究員

海洋科学技術センター研究員 平成 5年10月

平成 9年12月 地球フロンティア研究システムグループリーダー

平成15年 3月 北海道大学低温科学研究所教授

平成16年 7月 北海道大学低温科学研究所附属環オホーツク観測研究センター教授

平成26年 4月7

北海道大学低温科学研究所附属環オホーツク観測研究センター長 令和 4年 3月-

電子科学研究所教授 かまおき のぶゆき 玉置 信之氏



平成20年10月に電子科学研究所の教授として着任以来、 16年半にわたって北海道大学で教育と光機能分子の研究に 携わってきた。着任前はつくばの国立研究所の研究員であ ったため、それまでとは違った経験をすることができた。

一つは学部1年生に対する化学I、II、理学部生物科学科 や生命科学院の学生に対する専門科目の講義である。色々 な工夫を凝らして教えても、全員に十分理解させることは 難しかった。少しの学生に対してでも、記憶に残る授業に なっていればいいのだが。とにかく北大の学生が総じて授 業に真面目に取り組んでいることには感銘を受けた。

もう一つは、博士課程の学生に博士号を取らせるための 研究指導である。私の研究領域内でその時に最も重要と考 えるテーマを与えて、一緒に研究を行った。学生にとって は博士号を取るための研究であるが、私にとっては、正に 私の研究の中心である。幸い学生に対するスカラーシップ が充実していたことと留学生が非常に熱心であったため、 研究は順調に進み、20人ほどの博士を輩出することがで きた。

このような大学での有意義な経験ができたのは、サポー トや励ましをいただいた周りの教員、事務職員の皆様のお かげであると深く感謝している。最後に、これからの北海 道大学が益々発展し、そこにいる教職員や学生にとって素 晴らしい場であり続けることを願っている。

略歴

生 年 月 日 昭和34年11月9日

昭和57年 3月 千葉大学工学部卒業

昭和57年 4月 昭和63年 7月 民間(東洋紡績株式会社)

平成 4年 3月 千葉大学大学院自然科学研究科博士後期課程修了

平成 4年 3月 博士(工学)(千葉大学)

工業技術院繊維高分子材料研究所通商産業技官 平成 4年 4月

平成 5年 1月 工業技術院物質工学工業技術研究所通商産業技官

平成12年 4月 工業技術院物質工学工業技術研究所

分子工学部分子システム研究室主任研究官

平成13年 4月 独立行政法人産業技術総合研究所主任研究員

平成20年10月 北海道大学電子科学研究所教授

平成29年10月 令和元年 9月 電子科学研究所附属グリーンナノテクノロジー研究センター長

総合博物館教授

キ さ 7) ス おおけら 大原 昌宏 氏



大学院入学以来、一時、小樽市博物館に勤務をしていた 期間がありますが、40年にわたり北大にお世話になりまし た。その間、昆虫分類学の研究と教育に携われたことは至 極の喜びです。

大学院生と助手の時代は、農学部・院で研究三昧の生活 を送らせてもらいました。師にも恵まれ、身に余る指導を していただきました。助教授として総合博物館に移ってか らは、ゼロからの大学博物館立ち上げに関わらせていただ き、その経験と実績がその後の私の研究や教育活動の自信 となりました。札幌農学校から続く伝統ある昆虫標本コレ クションに携われ、昆虫分類学者としては、大変恵まれた 職場であったと思っております。約300万点に及ぶ昆虫標 本を管理することは、私の能力を超えていましたが、必要 最低限の維持管理をする覚悟で当たってきました。標本管 理業務を通して、世界中の昆虫研究者と知り合えたことも 嬉しいことでした。

しかし最近の「選択と集中」という研究費獲得の競争の 中では、十分な役割を果たせなかったと思っています。博 物館標本の研究と維持は、科学の基盤と考えます。大学人 の博物館へのより一層のご理解とご協力を切に願うもので す。最後に、定年までお世話になった多くの北大関係者の 方々に心から感謝申し上げます。

略歴

生 年 月 日 昭和36年12月9日

昭和60年 3月 鹿児島大学理学部卒業

平成 2年 4月 日本学術振興会特別研究員

平成 3年 3月 北海道大学大学院農学研究科博士後期課程単位修得退学

平成 3年 4月 小樽市博物館学芸員

平成 6年 3月 博士(農学)(北海道大学)

平成 9年 4月 北海道大学農学部助手

平成12年 4月 北海道大学総合博物館助教授

平成19年 4月 北海道大学総合博物館准教授

平成23年8月 北海道大学総合博物館教授

北海道大学病院教授 のりひる 典宏 氏 佐藤



この度、北海道大学を定年となりました。在職中は主と して新規医療技術開発関係の仕事を行っておりました。そ のため、医歯学系のみならず学内の様々な分野の先生方と 交流を持つことができ、大変有意義な日々を過ごすことが できました。この場を借りまして、お礼申し上げます。

また、任期の終盤は総長補佐、副理事として大学全体の 運営に関わる仕事もさせていただき、大変勉強になりまし た。少しでも本学の発展に貢献できていればこの上ない喜 びです。この3月末をもちまして定年となりますが、4月か らは特任教授として現行の仕事を継続させていただく予定 でおります。引き続き、学内外の多くの先生方のお世話に なります。ご指導、ご鞭撻、よろしくお願いいたします。

略歴

生 年 月 日 昭和35年3月18日

昭和60年 3月 北海道大学医学部卒業

昭和60年 4月 北海道大学医学部第二内科入局、血液内科学専攻

平成 7年10月 北海道赤十字血液センター研究課長

平成14年11月 北海道大学病院輸血部副部長/講師

平成18年 7月 北海道大学病院高度先進医療支援センター副センター長/講師

高度先進医療支援センター センター長/教授 平成21年 7月

平成22年 4月 北海道大学大学院医学研究科

先進医療マネジメント学講座 教授(兼務)

平成28年 4月 北海道大学病院臨床研究開発センター センター長

北海道大学病院病院長補佐

平成31年 4月 北海道大学病院先端診断技術開発センター センター長 (兼務)

北海道大学病院医療機器開発推進センター センター長 (兼務) 令和 2年 4月

令和 2年10月 北海道大学総長補佐

北海道大学病院医療・ヘルスサイエンス研究開発機構 令和 3年 4月

副機構長/プロモーションユニット長

令和 4年 7月 北海道大学病院医療・ヘルスサイエンス研究開発機構 機構長

令和 6年 4月 北海道大学 副理事

地球環境科学研究院准教授 豊田 和弘 氏



北海道大学には、平成7年10月から29年半にわたりお世 話になりました。50年前、中学生の時に荒川の水質調査を 体験し、環境科学の研究を志した私にとって、多様な環境 関連分野の専門家が集う本研究院での時間は、大変充実し たものでした。

着任から約20年間は、琵琶湖やバイカル湖など、日本や 世界各地の湖底堆積物コアを用いた古環境変動の研究に携 わりました。多数の貴重な試料を提供いただきながらも、 十分な成果を出しきれなかったことに忸怩たる思いがあり ます。また、サバティカル期間には、米国スクリプス海洋 研究所及びオレゴン健康科学大学に滞在し、海洋マンガン 酸化菌の触媒作用に関する実験に没頭し、満足のいく成果 を得ることができました。しかし、それを北大でさらに発 展させることができなかったのは残念です。

最後の10年間では、日本海の堆積物コアを用いた火山灰 層序の研究、汽水湖の年縞堆積物コアによる津波襲来履歴 の復元、アフリカ諸国やミャンマーでの環境汚染調査など に取り組みました。一部の研究では成果を得ましたが、多 くはまだ国際学術雑誌への投稿に至っておらず、定年後に 集中して論文化する予定です。一方で、日本市場の海苔や 札幌市の下水中の希土類元素に関する研究は最終年度内に 発表にこぎつけ、国際学術雑誌論文投稿支援事業のサポー トやプレスリリースを経験できたことは、嬉しい限りで した。

今後も場所を変えながら、これまでと同様の研究活動を 継続するつもりです。最後に、これまで素晴らしい研究環 境を提供してくださった北海道大学、そしてサポートして くださった教職員の皆様、ご指導くださった先輩や同僚の 皆様に、心より御礼申し上げます。

略歴

生 年 月 日 昭和34年12月17日

昭和57年 3月 東京大学理学部卒業

東京大学大学院理学系研究科化学専攻修士課程修了 昭和59年 3月

東京大学大学院理学系研究科化学専攻博士課程修了 昭和62年 3月

昭和62年 3月 理学博士(東京大学)

昭和63年 4月 東京大学理学部助手

平成 7年10月 北海道大学大学院地球環境科学研究科助教授

平成17年 4月 北海道大学大学院地球環境科学研究院助教授

平成19年 4月 北海道大学大学院地球環境科学研究院准教授

理学研究院准教授

みしな **三品** 具文 氏



私はこの度、長年勤めさせていただいた北海道大学を退 職することとなりました。在職中、多くの皆様に支えら れ、何とか今日までやってこられたことを心より感謝申し 上げます。

まず、同僚の皆様には、日々の業務において多大なご支 援を賜り、ありがとうございました。皆様の温かい励まし と協力のおかげで、充実した教職生活を送ることができま した。また、職員の皆様には、円滑な運営とサポートをい ただき、心より感謝申し上げます。皆様の尽力があってこ そ、安心して研究と教育に専念することができました。

次に、学生の皆様にも感謝の意を表したいと思います。 困難な研究テーマに挑戦し、時に私の予想を超える研究結 果を生み出してくれた皆様には、感嘆の念を禁じえませ ん。そうした学生の皆様の成長を見守ることができたこ と、そして彼らが社会に羽ばたく姿を見届けることができ たことは、私の人生の中でも最も意義深いものでした。こ れからもその情熱を持ち続け、更なる飛躍を遂げることを 心から願っています。

定年を迎え、一旦は退職となりますが、これからも非常 勤教員として教育の一端を担っていけることを大変嬉しく 思っております。これからもどうぞよろしくお願い申し上 げます。

略歴

生 年 月 日 昭和34年6月4日

昭和58年 3月 京都大学理学部卒業

昭和60年 3月 京都大学大学院理学研究科修士課程修了

昭和63年 4月 筑波大学物理学系助手 昭和63年7月 理学博士(京都大学)

平成 9年 4月 筑波大学物理学系講師

平成13年 7月 北海道大学大学院理学研究科助教授 平成18年 4月 北海道大学大学院理学研究院助教授

平成19年 4月 北海道大学大学院理学研究院准教授

工学研究院准教授 黒田 明慈 氏



略歴

生 年 月 日 昭和36年4月3日

昭和60年 3月 東京大学工学部卒業

昭和62年 3月 東京大学大学院工学系研究科舶用機械工学専攻修士課程修了 平成 2年12月 東京大学大学院工学系研究科舶用機械工学専攻第1種博士課程修了

平成 2年12月 工学博士(東京大学) 平成 2年12月 北海道大学工学部講師 平成 5年 4月 北海道大学工学部助教授

平成 9年 4月 北海道大学大学院工学研究科助教授 平成19年 4月 北海道大学大学院工学研究科准教授 平成22年 4月 北海道大学大学院工学研究院准教授

経済学研究院准教授

11 712 田中 嘉浩 氏



この度定年年齢に達し、経済学部に赴任してからの34年 の北大教員生活を終えることになりました。

赴任してしばらくの間は自由な気風や体制の中を私を含 めて皆が生き生きと研究や教育に頑張っていましたが、 「大学改革」があり、「大学改革」以降はあっという間に 過ぎて現在に至ったように思えるのは私だけでしょうか? 今後は自由な時間が多いので、何かじっくりと取り組め ることを見つけて行きたいと思っています。

末筆ながら、至らぬ点もあったかと思いますが、温かく 接してくださった皆様や根気強く付いてきてくれた多くの 学生・院生の方々に深く御礼申し上げます。

略 歴

生 年 月 日 昭和35年2月21日

昭和57年 3月 京都大学工学部数理工学科卒業

昭和59年 3月 京都大学大学院工学研究科数理工学専攻修士課程修了

昭和62年 3月 京都大学大学院工学研究科数理工学専攻博士後期課程単位修得退学

昭和63年11月 工学博士(京都大学)

平成元年 4月 平成 3年 3月 民間(財団法人電力中央研究所)

平成 3年 4月 北海道大学経済学部助教授

平成 6年 3月 平成 7年 1月 カリフォルニア大学バークレー校客員研究員・フェロー

平成12年 4月 北海道大学大学院経済学研究科助教授 平成19年 4月 北海道大学大学院経済学研究科准教授 平成29年 4月 北海道大学大学院経済学研究院准教授

医学研究院准教授

1 23 キさたか 正尊氏 工藤



昭和61年に北海道大学医学部医学科を卒業し、産婦人科 教室に入局しました。道内の関連病院で研修を行い、米国 スタンフォード大学への留学を2度経験しました。留学中 は、ゴナドトロピン受容体に関する研究をおこない、その 後、ゴナドトロピン受容体に類似の新しい受容体の発見に も関わりました。

帰国後は、生殖内分泌領域の研究などを行い、臨床では 腹腔鏡手術や体外受精などの不妊治療を北海道大学病院で 担当しました。腹腔鏡手術や体外受精は、今では一般的な ものですが当時は黎明期で、まさにその進化とともに歩ん だ30年です。なんとか無事に経過しましたが、これまで、 教育、研究、臨床においてお世話になった多くの皆様に心 から感謝いたします。これからは、2年間の再雇用期間に なりますが、北海道大学と皆様のますますのご発展を祈念 申し上げます。ありがとうございました。

略歴

昭和61年 3月 北海道大学医学部医学科卒業

昭和61年 5月 北海道大学医学部產婦人科医員

昭和62年 4月 天使病院產婦人科医員

昭和62年 7月 北海道砂川市立病院産婦人科医員

平成 2年 4月 中標津町立病院産婦人科医長

平成 4年 7月 北海道大学医学部附属病院産婦人科

平成 5年 9月 平成 8年 5月 スタンフォード大学留学

平成 8年 6月 北海道大学医学部附属病院助手

平成10年 6月 平成11年 8月

平成11年 8月 厚生連札幌厚生病院産婦人科医長

平成12年 4月 北海道大学医学部附属病院助手

平成15年 4月 北海道大学病院周産母子センター講師

平成18年 4月 北海道大学大学院医学研究科 生殖内分泌 · 腫瘍学分野 助教授

平成19年 4月 北海道大学大学院医学研究科 生殖内分泌 · 腫瘍学分野 准教授

平成30年 4月 北海道大学大学院医学研究院 産婦人科学教室 准教授

情報科学研究院准教授

おかもと 淳 氏 岡本

この度、長らくお世話になった工学部並びに情報科学研 究院を退職することとなりました。長年にわたる皆様から のご支援とご協力に心より感謝申し上げます。

振り返れば、微力ながらも20名の博士課程学生の指導に 携わり、その半数が国内外の大学で活躍していることを知 り、わずかながら若い人たちの力になれたのではないかと 感じております。また、研究においては、産学・地域協働 推進機構のご尽力により、北大で4番目に設置された産業 創出講座(オプトクエスト先端光デバイス開発部門)を6 年にわたり担当する機会を得ました。企業の皆様と共に取 り組んだ研究の日々は、大変刺激的で、貴重な経験となり ました。誠にありがとうございました。

かつて、身に覚えのない中傷を受けた際には、もう辞め ようかと思うこともありましたが、名和豊春元総長、並び に、小柴正則元情報科学研究科長に温かく励ましていただ き、深く感謝しております。また、現在の研究室では、富 田章久教授に多大なるご支援をいただきました。先生のお かげで、この先、特任教員としてもうひと頑張りしてみよ うという気持ちになれました。誠にありがとうございま す。皆様の今後のご発展とご健勝を心よりお祈り申し上げ ます。

略歴

平成 2年 4月 北海道大学工学部講師

平成 7年 4月 北海道大学工学部助教授

北海道大学大学院工学研究科助教授 平成 9年 4月

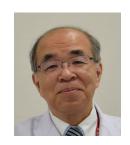
北海道大学大学院情報科学研究科助教授 平成16年 4月

平成19年 4月 北海道大学大学院情報科学研究科准教授

平成31年 4月 北海道大学大学院情報科学研究院准教授

北海道大学病院准教授

のぶひさ 石黒 信久氏



小児科のサブスペシャリティとして感染症を専攻し、 HTLV-Iや新興呼吸器感染症 (ヒトメタニューモウイルス、 ヒトボカウイルス、KIポリオーマウイルス、WUポリオー マウイルス)、インフルエンザ、肺炎マイコプラズマなどに 関する基礎研究及び臨床研究に従事してまいりました。ま た、北大病院感染制御部においては、薬剤耐性 (AMR) 対 策、感染症診療サポート、さまざまな病原体によるアウト ブレイク対策などに取り組んでまいりました。

令和元年に端を発した新型コロナウイルス感染症のパン デミックは、100年に一度の出来事でしたが、感染症アウ トブレイクに対する日常からの備えの重要性を改めて痛感 する貴重な経験となりました。この期間中、ご指導いただ いた恩師や先輩、学内外の先生方、研究や業務を共にした 同僚や後輩、そして研究にご協力いただいた医療機関の先 生方に、心より御礼申し上げます。

略歴

生 年 月 日 昭和34年8月24日

昭和59年 3月 北海道大学医学部医学科卒業

平成元年12月 北海道大学医学部研究生

平成 5年 3月 博士 (医学) (北海道大学)

平成 5年 9月 アメリカ合衆国ニューヨーク大学医療センター 客員研究員

平成16年 6月 北海道大学病院 助手

平成19年 4月 北海道大学病院 助教

平成19年 4月 平成24年 3月 北海道大学病院 感染制御部 副部長

平成21年 4月 北海道大学病院 准教授

平成24年 4月 北海道大学病院 感染制御部 部長

監事支援室特命職 光樹 氏 桃山



遠い先のことと思っていた定年をついに迎えることにな りました。今は、役職定年、特命職への配置換や再雇用が あり、定年という区切りを迎える感慨深さはあまり感じて いないというのが正直なところですが、これまでの嬉しか ったこと、辛かったことなど、どの場面でも多くの方々に 支えられて、ここまで無事にたどり着くことができた気が します。

実務では、人事関係業務に従事する機会が多くありまし た。日々の業務はスムーズに進むことは多くなく、いつも 課題等に追われていた印象です。いくら読んでも複雑で難 解な法令、規則、通知との格闘、法人化前後の連日遅くま での残業等々が思い出されます。

仕事以外にも、職員バレーボール部の活動を通じて教 員、技術系や医療系など、違う職種の方々や、各配置先で 出会った方々との交流など、充実した時間を過ごさせてい ただきました。

これまで、二度の帯広畜産大学勤務、函館キャンパス勤 務の機会もいただき、札幌を離れての単身生活や、それぞ れの地の文化に触れ、教職員と交流できたことは、とても 貴重な経験、財産となっております。

長きにわたりお世話になった皆様に、この場をお借りし て心より感謝申しあげます。ありがとうございました。

略歴

昭和57年	4 Fl	北海道大学

平成14年 4月 带広畜産大学総務課人事係長

平成16年 4月 带広畜産大学企画総務部総務課人事係長

平成17年 4月 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター専門職員

平成19年 4月 北海道大学総務部人事課係長

平成21年 4月 带広畜産大学企画総務部総務課課長補佐

北海道大学総務企画部人事課課長補佐 平成23年 4月

平成27年 4月 北海道大学函館キャンパス事務部事務長

平成30年 4月 北海道大学工学系事務部総務課長

令和 3年 4月 北海道大学総務企画部人事課厚生労務室長

令和 5年 4月 北海道大学企画調整役(兼)監事支援室長

令和 6年 4月 北海道大学監事支援室特命職

医学系事務部総務課特命職 鴨志田 敏則 氏



昭和57年3月31日にはるばる田舎から出てきて札幌駅に 着いてから、もう43年にもなりました。長い年月が経った にもかかわらず、ついこの間のように感じます。

目指していた国家公務員として採用され、今は国立大学 法人職員となってしまいましたが、その間、道内3大学と 旧文部省でも勤務させていただき、不可はあれども大した 可もないながらなんとか終えることができました。これも 良き同僚、上司に恵まれたからと思っております。

振り返って思い出されることは、仕事のことよりも良き 時代でのレクリエーションや職場の仲間との楽しかった遊 びのことの方が多いように思います。

私は、この3月をもって北大を去ることにしましたが、 今までの経験を無駄にすることなく、今後の人生を歩んで いきたいと思います。

国立大学にとっては大変厳しい時代となりましたが、創 基150年を迎え益々北海道大学が発展することを外から祈 っております。

長い間お世話になり、ありがとうございました。

略歴

生 年 月 日 昭和39年2月18日

昭和57年 4月 北海道大学

平成 3年 4月 文部省大臣官房人事課併任

平成14年 4月 旭川医科大学総務部庶務課人事第一係長

平成17年 4月 北海道大学医学研究科·医学部人事係長

平成20年 4月 北海道大学総務部職員課係長

平成22年 4月 北海道大学総務部人事課労務管理室係長

平成24年 4月 北海道大学医学系事務部総務課課長補佐

平成26年 4月 北海道大学国際本部国際連携課課長補佐

平成29年 4月 帯広畜産大学総務課長

平成29年10月 北海道教育大学総務部人事課長

令和 2年 4月 北海道大学歯学事務部事務長

令和 4年 4月 北海道大学農学事務部事務長

令和 6年 4月 北海道大学医学系事務部総務課特命職

工学系事務部教務課特命職

相内 征也 氏



大学卒業後に最初に就職したのは旅行会社でした。日々 営業やツアーの企画・添乗業務に従事していましたが、湾 岸戦争で海外旅行が激減し、会社の先行きに不安を感じる ようになりました。そうした中、大学時代に今村先生(元 北大総長)の行政法ゼミに所属していたことから、この経 験を活かして再度公務員を目指そうかと考えました。年齢 制限により次の年の試験がラストチャンスということに気 づき、大学の同期の官庁勤務の友人に公務員試験勉強の話 を聞きやれば合格できると実感し、その後会社を辞めて半 年間猛勉強しました。

国家Ⅱ種、労働基準監督官等に合格し、小樽商大に採用 となりました。小樽商大で7年間勤務した後、北大へ異動 となり11年間勤務し、その間、放送大学に3年間出向とな りました。北大での最初の職場が法学部で、今村先生や大 学時代に憲法を教えていただいた常本先生がおられた所で 勤務することができ感慨深いものがありました。

管理職となってからは、函館高専、旭川高専、苫小牧高 専で勤務し、室蘭工大を最後に役職定年となり、11年振り に北大に戻り、浦島太郎状態で仕事をする毎日で四苦八苦 していましたが、何とか定年を迎えることができました。 これもひとえに、多くの皆様に支えていただいたお陰であ り心より感謝申し上げます。最後になりますが、北海道大 学の益々の発展を祈念いたしますとともに、皆様方のご健 勝とご活躍をお祈り申し上げます。

略歴

生 年 月 日 昭和38年11月21日

昭和62年 3月 北海学園大学法学部卒業

昭和62年 4月 平成 3年12月 民間 (東武トラベル株式会社 (現・東武トップツアーズ株式会社))

平成 5年 4月 小樽商科大学庶務課

平成12年 4月 北海道大学法学研究科・法学部

平成14年 4月 北海道大学総務部研究協力課

平成14年10月 放送大学学園教務部教務課教務第三係長

平成16年 4月 放送大学学園教務部教務課教務係長

平成17年10月 北海道大学学術国際部国際企画課国際交流係長

平成21年 4月 北海道大学学務部学生支援課係長(総務担当)

平成23年 4月 北海道大学国際本部国際連携課係長(総務担当)

平成25年 4月 函館工業高等専門学校総務課長

平成28年 4月 旭川工業高等専門学校総務課長

平成31年 4月 苫小牧工業高等専門学校学生課長

令和 4年 4月 室蘭工業大学入試戦略課長

令和 6年 4月 北海道大学工学系事務部教務課特命職(学生支援担当係長兼務)

■人事

令和7年2月28日付発令

新職名(発令事項)	氏 名	旧職名(現職名)
【教授】 (任期満了)	ALDRICH COURTNEY CORTEZ ROWLANDJONES SARAH LOUISE	大学院薬学研究院教授 大学院薬学研究院教授

令和7年3月1日付発令

新 職 名(発令事項)	Æ	<u>.</u>	2	名	旧職名(現職名)
【教授】					
大学院先端生命科学研究院教授		岡	慎	治	大学院先端生命科学研究院准教授
大学院工学研究院教授		田	泰	彦	(採用)
大学院情報科学研究院教授	樋	浦	諭	志	大学院情報科学研究院准教授

新任教授紹介

令和7年3月1日付



先端生命科学研究院教授に

中岡 慎治 氏

先端融合科学研究部門 組織構築科学分野

生年月日 昭和54年11月20日

静岡大学大学院理工学研究科博士後期課程修了(平成19年3月) 博士(理学) (静岡大学)

専門分野

数理生物学



工学研究院教授に

*** た *** ひこ **太田 泰彦 氏**

工学系教育研究センター

生年月日 昭和36年2月5日

北海道大学理学部化学第二学科 卒業 (昭和60年3月)

専門分野

科学技術・産業政策、外交・通商政策、 ジャーナリズム論



情報科学研究院教授に

樋浦 諭志 氏

情報エレクトロニクス部門 集積システム分野

生年月日 平成元年12月30日

最終学歴

北海道大学大学院情報科学研究科博士後期課程修了(平成28年12月) 博士(工学) (北海道大学)

専門分野

光スピントロニクス、半導体光物性・光デバイス、 結晶成長、薄膜表面物性

■計報

医学研究院 助教 打浪 雄介 氏 (享年39歳)



医学研究院助教として大変ご活躍中 でありました 打浪 雄介 先生が、 令和7年1月6日に急逝されました。打 浪先生の生前の多大なるご功績を偲 び、謹んで哀悼の意を表します。

打浪先生は平成24年3月に北海道大 学医学部医学科を卒業された後、市立 札幌病院にて2年間、初期研修に励まれ 医師としての礎を築かれました。平成 26年4月北海道大学医学部放射線医学 講座に入局され、放射線治療医として の人生を歩み始められました。平成27 年4月には北海道大学大学院医学研究 院博士課程に入学し、消化器がんの高 精度放射線治療に関する研究に従事さ れました。大学院在籍中は筆頭著者と して2編の原著論文 (PMID: 27328734 & 31400082) を執筆され、令和元年12 月に「強度変調放射線治療において胃 の呼吸性移動が及ぼす影響についての 研究」にて医学博士の学位(甲第13817 号)を取得されました。また、その 間、北海道大学病院、恵佑会札幌病院 や北海道がんセンターで放射線治療医 として研鑽を積み、令和元年8月に放射 線治療専門医の資格を取得されました。

令和2年4月からは医学研究院放射線 治療学教室の助教として、臨床・教 育・研究に尽力されました。

臨床では、専門とする膵癌や肝癌の 高精度放射線治療に熱心に取り組まれ ました。その温厚な人柄と誠実な姿勢 により、患者さんはもとより、医学物 理士、放射線技師、看護師など多くの 同僚からも厚い信頼を寄せられる、か けがえのない放射線治療医でした。

教育では、放射線治療学教室の教育 担当として主に臨床実習に携わり、台 湾国立陽明交通大学から当科に実習に 訪れた医学生にも熱心に指導されまし た。また、大学院生の研究にも的確な アドバイスを送るなど、後進の指導・ 育成にも献身的に取り組まれました。

研究では、大学院生時代から続く消 化器がんの高精度放射線治療に関する 研究に情熱を注がれました。常に研究 的な視点を持ちながら臨床現場での疑 問や課題の解決を目指し、特に膵癌や 肝癌の高精度放射線治療の発展に資す る消化管の動きの解析に関する数多く の研究を手がけ、着実に成果を挙げら れました。その結果、この5年弱の間 に筆頭著者として9編の原著論文を発 表しました。さらに、打浪先生はその 鋭い着眼点や独創的な発想により、科 研費若手研究(23K14857)をはじめ、

秋山記念生命科学振興財団研究助成、 武田科学振興財団医学系研究助成、日 本放射線腫瘍学会研究課題、日本医学 放射線学会Bayer研究助成など多くの 競争的資金を獲得され、研究活動をさ らに発展させてこられました。

近年では、The Federation of Asian Organizations for Radiation Oncology (FARO) Oresearch committee O-員としても活躍され、FARO加盟の アジア13カ国における転移性脳腫瘍 への放射線治療の実態調査を主導さ れました。その成果は論文(PMID: 39418623) として報告され、国際的に も高い評価を受けました。

打浪先生は、研究責任者として多く の研究を実施中、あるいは計画されて おり、これからも日本全国、さらには 世界の放射線治療学の発展に寄与し、 また、卓抜したアイデアをもって放射 線治療の新たな可能性を切り拓き、多 くの患者さんの未来を支えるものと心 から信じておりました。それだけに、 あまりにも早いご逝去の報に接し、痛 惜の念に堪えません。

打浪先生の誠実なお人柄と優れたご 功績は、いつまでも心に深く刻まれ続 けます。どうか安らかにお眠りくださ い。心よりご冥福をお祈り申し上げ ます。

(医学院・医学研究院・医学部)

編集メモ

●一般選抜の前期日程及び後期日程個別学力検査等が、今 年度も無事に終了しました。

入試業務を担当された教職員の皆様、お疲れ様でした。



試験会場の様子

●3月10日(月)より本学公式クラウドファンディングにて 「第3弾!世界のクマ研究最前線 地球の未来をクマの生 態から読み解く」が公開となりました。 詳細は、QRコードからご覧ください!

北海道大学クラウドファンディング https://readyfor.jp/pp/hokudai





裏表紙メモ

今月のキャンパス風景は第一体育館です。3月25日(火)は令和6年度学位記授与式が行われました。

春は別れと出会いの季節です。今年度も学士課程2,405名、修士・専門職・博士課程1,952名が卒業・修了の日を迎えまし た。4月になれば、新入生がキャンパスへやってきます。

卒業生・修了生も新入生も、新しい場所で新しい人に出会う日々を迎えます。どんな毎日が待っていてもきっと、未来はい つも面白いはずです。

キャンパス風景 60 第一体育館 (北17条西7丁目)

